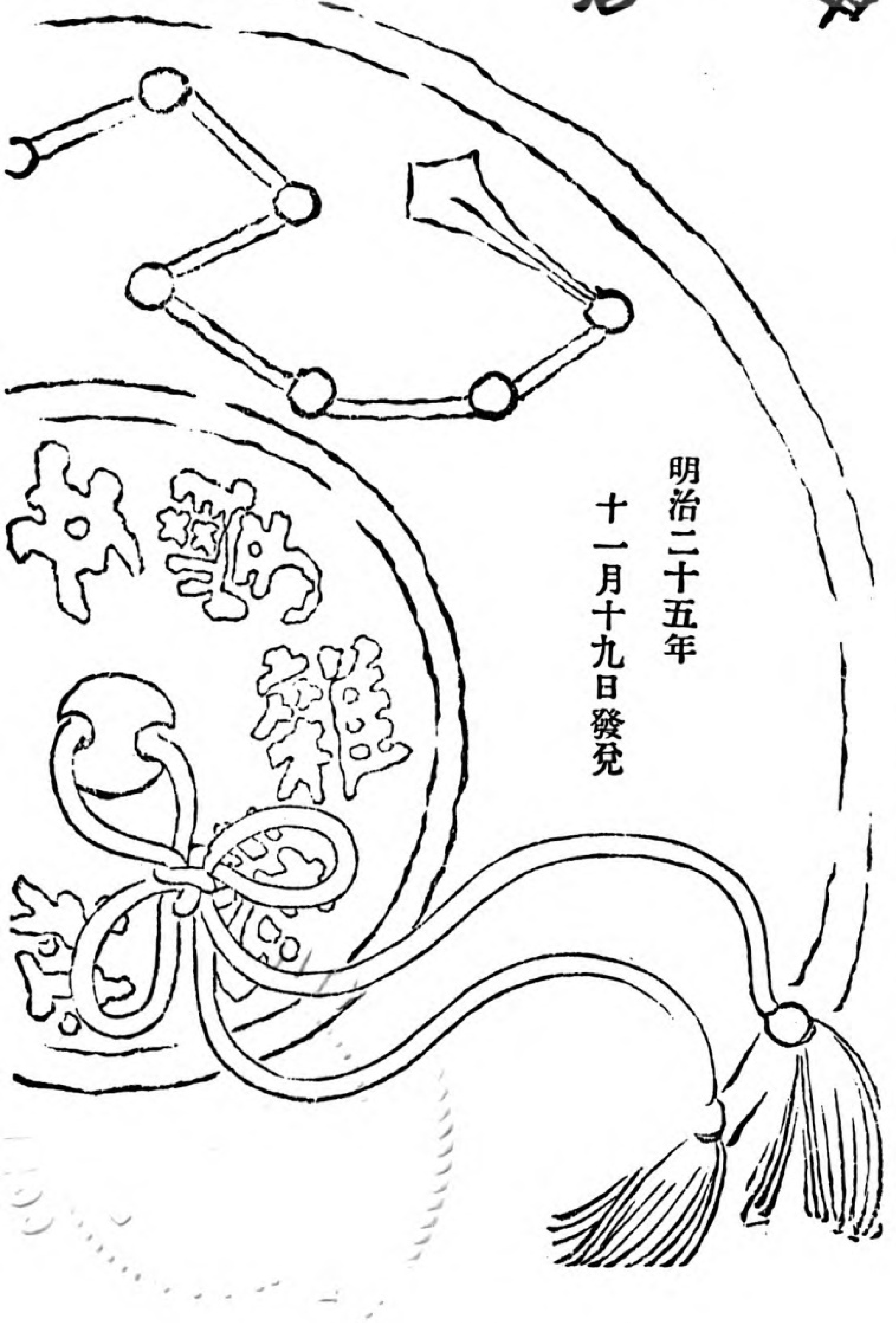
女學雜誌

第三百三拾貳號

甲の巻



明治二十五年十一月十九日發兌

注意

社說 社會問題一卑見ならびに職工軍團 創立の主旨精神の二篇は、將に痛迫し來らんとする此問題に對するの警戒と、之を救濟する實際的一法を說明す軍團は即ち安東太郎、江原素六、其の他三氏と吾社員との創立する所のものたり。香川景樹歌論に對する雲峯子が細緻精巧なる批評の續文は彌々妙に入り武道發源の第二篇は、武士道と武藝の開發と題し例の如く天知子其の得意の快筆を揮ふゆきだをれの長韻文は透谷子が病床に於ける吟詠にして沈痛幽淸なり押川方義君は山月子が護教記者の評に對するもの、文短意長、頗ぶる慨氣を見るべし。博士ヘボン氏自敘傳は此長老君子を憶ひ想ふ人の一讀すべきもの教育學附錄は正に幼稚園の章に移り、漸やく、フレーベル氏の傳に入んとす。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 332. NOVEMBER 19th. 1892.

EDITORIAL:—One Word in Regard to a Social Problem.

BIOGRAPHY:—Dr. Hepburn's Autobiography.

MISCELLANEOUS:—The Artisan's Army. The Temperance Song. "Overtaken by the Snow." (A Poem.)

LEADING ARTICLES:—Military Spirit, its Rise. (II.)

CRITICAL NOTES:—Kagawa Kagekiyo on National Poetry.

CONTRIBUTED ARTICLES:—

CURRENT EVENTS:—

本號(第三百三拾二號)目次

○社說 社會問題一卑見
○史傳 博士ヘボン氏自叙傳
○雜錄 職工軍團創立の精神(伊藤爲吉、安東太郎、江原素六、高良二、大熊氏廣、嚴本善治)○禁酒會の歌○ゆきだをれ(韻文)透谷子
○論說 武道の發源(中)武士道と武藝の開發(天知子)
○批評 大西文學士香川景樹翁歌論に對する批評(雲峯子)○千代田城大奥○今古雅譚○名家尺牘文集
○寄書 押川方義君(山月子)○其筋の御方に御質問仕候(熱海にて一書生)○雜感(日本の社會、學者多きを憂ひず、人を批評するは即ち自らを批評する也、亡き母)秋玉庵記
○時事 教科書撿定の秘密漏洩○東洋自由黨○北海道開拓の所云る大計畫○賭博刑廢止運動○牛疫傳播○贈正四位○田島晴雄○品川彌二郞子○○信用組合○千島探撿○教育國立期成同盟會○○

前週(第三百卅一號)赤表

○社說 宣教師派女學校に一策を献す(中)
○雜錄 今昔ものがたり(名と人と。其角の機智。ものには餘韻ありたき事。從者と秀詠。法文は簡易明晰を主とす可し。京と江戶の衣裳競べ。律義者と武邊)○沙翁曲中の淑女
○論說 朝鮮に於て爲す可き日本婦人の事業(在仁川、青山好惠)
○家政 家兎の飼養法○家內重寶錄(金柑水を製する法。飯の炊ぎやう。茶飯。栗飯。鹽の汚を去る。馬鈴薯の貯方。肉の煮方。牛の舌。魚の煮方。串海鼠。牛乳の腐れ。醬油の黴。しやうとんのだし。椎茸。牛乳の甘味。衣物に油のつきたる。○茶話會(會話上の心得。竈に近き壁。老人の居間。天井の板。傘を乾す心得。湯に浴しのぼせぬ法。坂を登る法。)○家庭の養鷄○黃金の砂一二三(ビスケツト製法。肉ぞうすい。揚物新料理法。きらづ。
○摘要 報知新聞の婦人問題 ○歷史上女の觀察
○史傳 松坂富子 ○石川阿石
○小說 朝顏(絕ゆる緣)手習屋主人
○時事
○女報
○問答 ○附錄(孤兒之友)

前々週(第三百卅一號)白表

○社說 英雄辨(ヒーロイズム、英雄の需要英雄の流行、無英雄眞天地)
○批評 德川十五代史 ○近江聖人 ○紀文大盡 ○伊太利建國三傑 ○青年と教育 ○大西文學士香川景樹の歌論に對する批評(雲峯子)○關東警凱歌(透谷子)
○論說 武道の發源(東洋に坐禪の國あり)○震災后一周年の感(山月子)
○雜錄 鬼心、非鬼心(脫蟬子)○豐秋に凶荒を想ひ震災を憶ふ(畜鋤子)
○時事 最大恨事 ○村橋久成氏 ○新しき四男爵 ○開墾の偉業 ○新內藏頭 ○報知社長老 ○この下露 ○德川家康論 ○代言人試驗 ○二新聞無罪 ○公會議の妙 ○法界悲風 ○脩身教科書 ○福澤翁銅像 ○大村益二郞 ○大演習 ○國民之友 ○北海屯田兵
○片々

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌　第三百卅二號　明治二十五年十一月十九日發兌

社説

勞働問題一卑見

新經濟派未だ此日東に耀やかざるに當り、同盟罷工、勞働問題の二句、既に早く新聞紙面に歌はれたり。數年來識者が苦慮せし所ろ不幸にして空しからず、世海の大波すでに東洋の孤岸を打てり。

蓋し、從來の職工勞働は、人、人の爲に使はるゝにてありき。今や、人、器械の爲に使はるゝの時代に入れり。車轆々として、晝夜廻轉すれば、人、暫らく休息せんと欲するも、蒸氣は呼息を止むるとなし、人は即はち蒸氣の爲めに酷使せらるるなり。株主は四方に散在して、職工の顏をすら見たるとなし、何んぞ其痛痒を感ぜんや。職工長も亦た株主の爲の一種の器關なり、此器關自から裁量すると能はず、亦純然たる一の物躰のみ、而して千百の職工人は悲しひ哉、如此き物躰に支配せらる。彼等は最早や、煙草を吸ひ、雜談し、ブラ〳〵として遊び半分に仕事を爲すと能はず。肩に手拭を掛け、鼻歌を歌ひ、不定時に出會し、ゆる〳〵仕事着に着換え、道具を調ふるとに二三時間を費やすべき餘裕を存せず。彼等は、八時間乃至十二時間、立つゞけに立ち、働らきつゞけに働らき、些少の餘暇をすら有せず、偶たま非常の特待を以て暫時の休息時間を假かるゝとありとも、宛がら神經質の藥劑師が尤とも掛念して分量を盛りたる如く、明らかに何分秒と定めて毫末も餘分を殘さず。嗚呼、今の職工は、箱の内を家とし、時間を壽命とし、一定の賃錢を運命として、其他に何の變化あるとなし、何の面白きとあるなし。彼等は、最早や、幾何學の人にして、美術の人にあらず、死せる物躰は彼等が伴侶たり、生ける温かき血液彼等が周圍に觸るゝとなし、彼等が躰内に流るゝとなし。嗚呼、彼等は器械となり了らんとす、而して今の雇ひ主は、彼等を器械と爲さんとを希望する者也。

此に於てか、同盟罷工の事、往々にして起る。同盟罷工の起る、必らずしも、雇ひ主の無情なるが爲めのみにはあらじ。然れども、其多くは、今の雇ひ主が、古の雇ひ主の如くなら

ざるより起る。古の雇ひ主の如くならざるとは、其被雇に直接せず、直接せざるが故に其出入を念はず、其立身を望まず、一言するに、毫も其痛痒を感ぜざるに由るなり。

然らば、之を何如にして救濟すべき乎。今の雇ひ主をして古の雇ひ主の如くならしむる、法なきにあらず。只だ到底其の行はれざるを憾みとす。たとひ幸ひにして行はるゝとありとも、職工の數の多くして、隨つて其去就變遷の頻繁なる、遂に其雇ひ主に對して、古の被雇の如くなると能はざるを何如んせん。古の雇被雇は、今の勞働問題の參考となすとを得、然れども、單に之を古に復して、只だ舊來の法を墨守するに於て安んず可きにあらざる也。

古來の仁人君子、幾多の救濟法を說けり。之が爲めに夢幻境を理想せしものあり、之が爲めに家財を蕩盡せしものあり、之が爲めに一生を獻寄したるものあり。然れども、其形迹に就て一觀すれば、遂に、ウトーピア(蜃氣樓閣)と題すべき書中に網羅す可きの經綸たるのみ。其志の殊勝なるによりて、直ちに以て之を現世に倣ふ可きにあらず。

我黨惟みるに、救濟法、當に三あるべし。第一は、政府の手を假るべき也。第二は、宗敎家及び君子仁人の手を假る可き也。第三は、當路雇主の猛省を要むべき也。

所云る、政府の手を假るとは、法律によりて、之を制するを云ふ。婦人及び幼者の勞働時間の如き、同盟罷工に對する處置、並びに同盟罷工に對する雇主が連合に對するの處置の如き、職工組合の保護及取締の如き、尤とも溫和なる賃銀制限法の如き、徒弟約條及び被雇約束の上に於ける制裁並びに證明の如き、多數職工使雇の會社撿覈の法の如き、若くは職工場同盟委員會監督の法の如き、皆な、餘り干涉に過ぎず餘り放任に過ぎざる適度の制律を要す可きものたり。

所云る、宗敎家及び君子仁人の手を假るとは、彼等が、ゼネラル、ブースの經綸に類似せる方法を以て、百端万般の救濟法を案出し、實行し、もしくは其實行者の精神主動となり、彼の可憐ある職工に、或ひは、少時の安慰を得せしめて、以て其鬱勃たる不平を散し、其絕望せる失意を鼓舞し。或ひは、自由敎育の途を備へて、以て其の無學なる子弟を敎え、此の子弟に立身の方法を得せしめ、職工に種なく、二代にして再たび可憐なる乃父のごとくならしめざるとを期し、或ひは

簡易なる貯蓄銀行を設け、同時に自由なる融通銀行を建て、職工の壽命を一日以上に引延して、其勤儉の德を養成し。敎會の仕組を安樂にし、講義場を多くし、天幕傳道を盛んにし、製造所内に傳道師を兼たる無給職工長を納れ。會社の近傍に、廉價にして愉快なる大下宿所を設け、所内を一のホームの如くにして、樣々の和樂法、敎育法、立身法を設くるとの如き皆是也。若し小區域に大多數の製造所あるとより看下せば、日本のマンチエスターは、蓋し市外の王子村なるか。我黨日夜其景況を觀察して、窃かに之が爲めに經綸するに、宗敎家及び君子仁人の得て大利他の事業を奏するとを得可き方便決して尠しとせざるとを確認せり。

所云る、當路雇主の猛省を求むるとは、管子の經濟に據りて、與ふるは即はち取るものたるとを明辨し、會社の利益を職工に配當するは、株主を增して資本を加ふるに均しく、職工の智識財產を增加せしむるは、會社に貯蓄し、其安固を增し、其發達を早くするに同じきとを悟り、職工を會社外の器械と一視せずして、之を社内の社員と見做すに至らんとを要むるにある也。會社の組織法、其種十を以て數ふるとも、括するに、此の同利同益主義の右に出る良法の存せざるとを認たむ。然れど、法は末也、先づ其精神を要す。法は、塲合によりて變通せざる可らず、精神はあらゆる有志の人を通して一貫せずんばある可らざる也。故に、我黨は、其救濟法の制度如何んに至りて强がち、私見を執守するものにあらず、たゞ滔々たる社會主義の波の音既に高く、慘々たる職工親子の悲しき聲早く彼方此方に反響するに當りて、同胞の速かに猛省し、猛省するのみならず、苦慮し、案出し、實行し、速やかに生ける救濟法を成就せしめんとを熱望するの念に切なる耳。

パスカル曰く、人は流の葦なり、宇宙間に於ける最と弱きものなり、然れど彼は考ふる所の葦なり、宇宙之を碎きたりとも、彼は宇宙よりも尙ほ高貴なるもの也、彼を殺せし所のものよりも彼は尙ほ高貴なるもの也、何んとなれば、彼は其殺さるゝとを知り、死するとを知り、宇宙が彼の上に勝利を得たる故由を認識せり、然れど、之を碎く所の宇宙は自から之を知らざれば也、左れば人は此宇宙よりも尙ほ高貴なるもの也。

史傳

博士ヘボン氏自叙傳

日本の開港、日本の傳道、日本の醫學と共に長久に紀念せらる可きは、博士ヘボン氏と云へる名なり。然れど此名に優りて温かに紀念せらる可きは、氏が基督教徒たるの人物なるべし。而して、氏の人物を尤ともよく顯はしたるは、去十月十五日氏が義捐金によりて建築せられたる巨大のチョルチ横濱尾上町指路教會に於て催ふされたる送別會席上の風采言語にてありき。而して、此風采言語を尤ともよく表露する者、「速記者」第四號の速記文に優りたる者はあらず。故に請ふて左に其全文を轉載す。

全文を收むるは、此文を割くと、恰かも完人物を分つが如き心地のすれば也。此れを茲に掲ぐるは、同胞をして廣く且久しく氏を紀念せしめんとを欲すれば也。

○其一

（湖蟠辰之助君速記）

我兄弟我姉妹、あなた方が今日此送別會を設けたまふことを忝けなく思ひます、私は此御集りに付て申します、私は日本へ參りまして日本に年よりとなりました、日本に居りましたことは實に日本人を益する爲めでございました、それのみならず私は主イエスキリストの僕でございまして、此世界中はキリストの畑でございます、私はあなた方の通り總て世界に在る所の信者と同くキリストの畑に働くべき者でございます、私は僕なる故に主人の命令に從ふべき者で有りますから、私は此國の中に……キリストの畑に働きました、而して昔……ダイテイ六十年前私の心をキリストの爲めに捧げました、時に此國に往て働くは善いと思ひまして、僕は主人の旨に從ふ筈のものでございます故に、私は基より己の思ひの儘に依らず、我儘の事なく主人の言付に從ッて此國へ參りました、

私は醫者……醫學により……醫學の卒業をしました後、二十一歳の時から六年の間は、アメリカにて善い場所を尋れ、善い療治の場所……生活をする場所を尋れて、此處に一年の間彼處に一年の間住みました、併ながら私の心が安心になりませぬ、なぜ安心になりませぬでしたか、私の心の中にはアメリカを好んで居りましたけれども、醫者が多くありまして餘計すぎるでございます、私が此國に留まれば只多くの醫者等と競ふて彼人たちの害となると思ひました、夫れ故に私は醫者の無い國へ往くが善いと思ひまして、然して此世界に多くの國が有るが醫者の無い國も多く有る、本當に醫術を知らぬ國が多くある、又獨りの神、眞の神、活る神を知る所の國は少い、私は神を知らぬ國醫者の無い國へ往くことは善いと思ひまして、心の中に我主の言付と思ひまして、我親の家を去り親の國を去ッて支那へ往きました、支那に五年位留まッて療治をし支那人を教へ、神の御名イエス・キリストの救の道も教へました、併ながら私の妻が病氣になりまして、モウ支那國に留まることが出來ませぬ故、本國へ歸りましたのでございます、十三年の間は本國に留まッて生活し病人を療治致しました、然して私の療治が段々進歩して噂……評判になりました、

此時に於て日本といふ國は往古より鎖られてあッた國が開かれたと聞きました、私が支那に居る時度々日本の事を思ひました、又日本の評判を聞きましたには、キリスト教を嫌ひイエスの信者を殺すものと聞きました、けれども此日本から醫者或はイエスキリストを愛する所の信者の出來ることを願ひましたから、私は直ぐに己の身を與へて此國へ來る所の約束を爲しました、矢張りさうしてアメリカに在る所のことを思ひました、舟に乘り此國へ參りました、私が參りました時は丁度今より三十三年の前です、今月の十八日三十三年以前に横濱に上り神奈川に

居りました、三年の後横濱に移り三十年住みました、療治タイテイ病人を療治した事は十五年…幾万の病人を助けたいさ力を盡しました、けれども私も自分が病氣になりまして、能く起つこさが出來ませぬやうになッて苦痛で困りました、さうしてモウ此時日本の中に醫者が多くなり、醫學校も東京に出來、矢張り西洋の國から上手な醫者が參りまして日本の人を助けますから、私の療治をするこさは無駄さ思ひまして、其代りになる所の日本人の益を爲さんが爲めに、聖書又は字引を翻譯し…友だちさ共に聖書を翻譯しました、辭書を拵へて今日まで日本人の爲めに力を盡しました、

今は私年よりさなッて、記臆が惡くなッて耳が遠くなッて目が眊みて役に立たぬものさなりました、又私の妻も病氣になり此國を去ッて本國へ歸るが善いさ思ひ、而してモウ數日の後立ッて此處を去り本國へ參ります、

私は大體ドコに居ても私の働らく時はモウ終りました、本國へ歸ッてもアチラにも永く居るこさは出來ませぬ、丁度聖書に書いて有る通り「我れは旅人我親たちの如く宿れる者なり」さ聖書にある、私は唯旅人…人の生涯は皆あなた方も旅人でございます、此世の中に永く住むこさは出來ませぬ體かに終りが參ります、併ながら聖書に終りはなし旅人さ申します、神に依る旅人…神は我父、父に依る旅人…誠に面白い言葉でござります、神に依らぬ旅人は患難、禍である、私も患難に度々遭ひました、災難に出逢ひましたさ雖も、我父に依り父さ共に有るからモウ幸ひになりました、災難は我喜びさなりました、而して往古イスラエルの人エヂプトを去ッてカナンの國へ旅をして往きました通りに、我儕も皆其通りです、其旅路に在る間は短い、或時は永い、私の旅路はチット永くなりました、七十八年の間旅をして我父の國へ赴いて往ッて居ります、而して兄弟姉妹さあなた方の先祖さ親たちも皆さん此天國に赴くべき旅路に歩いて、而して行く末あなた方さ私共さ共に我父の家に集ッて、誠に相互に喜びませう、

以下外國人に對し英語にて演說せられ
石本三十郎君口譯せらる

（臼井喜代松君速記）

外國の朋友に向ッて私が日本へ參りました始のこさを申上ます、私は今横濱に居る西洋人の中では一番老人ださ思ひます、今ではたッた私一人しか無いのであります、私は丁度日本に來ましてから三十三年になります、日本に妻を携へて渡來致しましたのが千八百五十九年十月十八日…日本政府さ北米合衆國さ通商和親の條約を結んだのが千八百五十九年の七月の四日のこさでござります、それだからして丁度日本が鎖國攘夷の主義をよして、さうして外國さ交通するさ言ふこさに國是がなりましてから二た月たッた計りの後に日本に來たのでござります、

始め日本に足を踏入れた時には日本に於てはどう言ふ風に私を受けて吳れるであらうかどう言ふ風に思ふであらうかさ言ふこさが一の考でござりました、日本國は基督教に反對である、耶蘇教の信者であれば容赦なく之れを殺す…殺したこさも知ッて居ッたのであります、それだからどうであらうかさ思ひましたけれども段々心を靜にして天に坐ます父の御心に任してそして基督教を傳へる途が開けば基督教を傳へやうさ云ふ決心を以て參りました、參りましてから神奈川に駐劄したる所の亞米利加の領事に往きました所がコンシュルが言はれるのには貴君はどうも一種違ッた階級の人である商賣をする爲めに條約を結ぶけれども基督教の宣教師が來る時には斯う云ふ風に取扱はなければならぬ斯う云ふ風にして吳れさ云ふこさは極めて無い、だからどう云ふ風になるか知れぬが先づ出來るだけの事は致して貴君を保護するやうに、貴君の便利を謀るやうに致しませう其時の開港場の長に相談をするから二日程待ッて吳れさ云ふこさであります、私は每日每日領事館に往きました、さうした所が開港場の長も承知して住居するこさを許したさ云ふこさでござります、續いて私の居るべき處は何處に居ッて宜いか、丁度神奈川に三つ寺があります、其中のドレか一ッを選べは宜しいさ云ふこさで其中の一の寺を選んで其中に住居致しました、

今日は横濱は五港の中で第一等の處で人口は十五萬を以て算へますけれども私が日本に始めて來た時分の横濱の有樣はどうであッたかさ言へば僅な漁師百姓の家があッたのみでござりました、で、條約を結んだ所の外國からも人が參りましたけれども餘程少數の貿易商人でありまして、建物さ云ッても今のやうにしッかりした建物は無く見すぼらしいざッさした建物がありました、其建物に住居して外國の人が商賣を致したのでありました、

其時分の横濱の區域は今の辨天の處から谷戸橋のある處の小さい河の處までが横濱の地域であッたのでござります、廣さはドの位であるかさ云へば先づ三百ヤードあるか無いかであッたのです、それで又其地面は住居するに適當した地面でも

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

無かッた、

それから居留地の區域と云ふものは辨天の處から前田橋のある處までが居留地の區域でござります、其他の處は皆水を以て蔽はれて居ります、人が船を浮べて――人が船で此邊を歩るいて居ッて、船で釣ッて居ッたことを能く知ッて居ります、さうで無い處は軟かな土に雜草が生へて居りまして今日の有樣とは違ッて居ります、今日は前に言ッた通り十五萬の人口がある一の大市街でござりますけれども其時には誠に小さな處で始めに建ッた所の家が……あすこまで家があッてそれから先きの河の方に至るまでは其時の英國荷蘭亞米利加の領事の頼に依りまして外の處の友達に加勢を頼んで間を打つ所の繩を持ッて寸法を取ッてさうして此處から此處までは家を建てる處、此處から此處までは往來だと云ふ測量の役を其時に務めました、

それから横濱の居留地を能く保護する爲めに區域を付けなければならぬと云ッて河が出來、之れを浚へて深くすると言ふやうになりました丁度御承知の居留地を島にして仕舞ふ……出島に、長崎に出島がある長崎の市街を離れて島が一ッあります、そんな風にする、其時分には未だ根岸より谷戸橋に續いた堀割と言ふものは無かッた、其後あの堀割が出來ました、さうして横濱管内の居留地が水に取卷かれた島であるが如く横濱の一の離れ島になりました、さうして日本の保護に依ッて今日の山手居留地となッたのであります、

今日私は前に申ました通り横濱に住居して居る外國人の中では一番古く居る所の者であると思ひましたから外國人の旅人の便利の爲めに是れだけの昔話を致しました、其時分神奈川横濱に居ッた所の人々で今日日本に止ッて居る者はござりませぬ、澤山の人が殺されました――日本の刀を以て殺されました、或はひどい疵を受けて片輪になッた所の者がござります、十三人は丸で殺されました者であります、私自身も危い日に會ッたことがある、殺さうとせられたことがある、或は一方に友達のやうな風をして居る所の者が私を暗殺する爲めに私の宅に來たことがありますけれども其者に私は一向害をするもので無いと云ふことが分ッて其者が自分の說を變へ私を暗殺することを止めたこともござりました、

是れだけは外國から近頃渡來して昔の事を知らない友人の爲めに横濱の昔の有樣をお話いたしました、

以下博士自ら日本語にて述べらる

私は數日にしてお別れ致します、私は誠に此三十三年の間此力を……此國に止ッて住みました、日本の人を助け力を盡しましたことを神に感謝します、アヽ私は本國へ歸ります、私の事業は終りました、本國に少しの間休みまして親たちの國へ參ります、

雜錄

職工軍團創立之精神

職工軍發起人　伊藤爲吉

職工軍創立委員
安東太郎
江原素六
髙　良二
大熊氏廣
嚴本善治

職工軍團創立趣意書

我國古來職人固氣なる語あり褒毀何れを意味するやを知らざれども蓋し錙銖の利に走らず樸訥任俠の風あるを云ひしならん而して又粗暴野鄙頑瞑の處あるをも含めるや知るべからず然るに近來職工社會を觀察するに美風漸く去て弊風生し善德衰へて不德長ぜんとす之れ惟職工社會のみの現象にもあらず或は時勢の傾向と云はんか然れども亦其の源因なくんば非ざ

るなり彼酔ふて市街に卑猥なる俚謡を謳ふもの雑踏の中衝觸して忽ち相喧嘩するもの多くは法被腹掛の人に之を見る彼等は勞働し從て得れば從て浪費し却て職人に錢なきを誇るものの如し而して業を執るに一も規律なく功を粗略にし施主の利益を慮らず常用手間に怠慢にして全く無慾なるかと思へば請取投げの仕事には驚く程狡猾なるものあり抑々書生は學校の名譽を重じ會員は其屬する協會の名義に愧ち大なる失德なきものなれども或る部分の職工は纔かに其技を覺ゆれば直に親方若くは棟梁の羈絆を脱して東西に渉行流轉し今日甲丁塲に行き明日乙作事に來り又翌日は他の普請塲にあるが如き姿にて毫も統率するものなきが故に終に附屬する所なきに至る是に於てか曾て身を責むるの標準なく一定の義務なきは自然の勢と云ふべし彼等の多くは教育鮮なし故に頑瞑にして德義に乏しく私利に汲々し氣品を高むるの念なく野鄙に安じ又自ら意匠を凝し或は古名工の跡を尋ねて技術を研磨せんと欲する進取の氣象なく終に凡庸に甘んず勤儉貯蓄を忘るゝと同時に兒女の教育を怠り家庭の眞情至樂を解せず實に彼等は社會憫れむべきの最たり將に罪を生むの恐るべき孵卵器なり今にして此が矯正の策を執らずんば其窮極を奈何此れ余等不肖を顧みず彼等の依る所の中心となり以て廉耻を教へ新智識を與へ所謂職人固氣の美風を發揚せしめて信用を恢復し常に平等に業に就くことを得せしめんと欲す庶幾くは施主たる人に裨益する所ありて彼等の樸訥任俠愛すべき氣風あるを知悉せしめ爲めに我社會の發達進歩を見るに至れば我國の前途期して待つべきものありと云爾

職工軍規則

第一章　名稱及定義

第一條　本團は職工軍と稱し各種の職工を結合し規律を軍制に則り從來の惡弊と戰ひ必勝を期せん爲めに組織せる義勇の團隊なり

第二章　目的

第二條　職工軍は正義正道を蹈んで職工社會の狀態を改良するにあり、

第三條　職工軍は自主自立の精神を以て眞正確實に業務を勵み處世の本分を盡すにあり

第四條　織工軍は諸般製作品の粗造濫製の弊を矯め内外需要者の信用を恢復せんとす

第五條　職工軍は自活し得ざる勞動者をして種々なる職業を修得せしめ自治自立の路を與へんとす

第六條　職工軍の目的は今日の悪習を改良し心神を教化せんが爲なれば毎日曜日は平素の業を休み此日を用ひて精神發達の道を脩むるものとす

第七條　職工軍は軍團の發達進歩を計らん爲め一の機關雜誌を發行し又徒弟養成の目的を以て各所に實業夜學校を設く

禁酒會の歌

雲峯譯

こたびウヱスト孃を迎ふるにつきて、西洋の禁酒會雜誌に出でしうたを譯せり。こはもとの譜にてうたひ得る樣にとある人のたのみありしが、迚も夫れにては原文の意味をつたへ難しと思ひて、讃美歌二百三十四番の譜にかへたり。もとの譜に合ふべきものは更らにものすべし。

一節

樂しき來む日　(二行四行押韻、西洋の詩に此種のものある故之に則りしものなり)

さかへのひかりは　地にてり渡り、
表號のしらひも　地をまとひつゝ。
われらののぞみを　世になし遂げて、
たのしき來む日に　凱歌うたはむ。
(コラス)のぞむ日は近し　その日とならば、
世はみな我主の　み國とならむ。
のぞむ日は近し、　その日とならば、
世はみな我主の　み國とならむ。

二節

さちなきくままで　このしらひもは、
神のめぐみにて　行きわたらむ。
かゞやくひかりと　平和のしるし、
天國と罪の世　つなぎあはせん。

三節

世のきはみまでも　神をばたゝえ、
地のかぎりまでも　主をほめまつらむ。
障はることなく　たのしきうたを、
救はれしたみの　うたふ日ぞ來む。

●附言　白紐(ホワイト、リツボン)は禁酒の記號なり、

ゆきだをれ

透谷子

病床にありての作なるからに調も想も常にまして整はざるところ多し讀者の寛恕を乞ふになむ。

○瘠せにやせたるそのすがた、
枯れにかれたるそのかたち、
　何を病みてかさはかれし、
　何をなやみて左はやせし。

○みにくさよ、あはれそのすがた、
いたましや、あはれそのかたち、
　いづくの誰れぞ何人ぞ。
　里はいづくぞ、どのはてぞ。

○親はあらずや子もあらずや
妻もあらずや妹もあらずや、
　あはれこの人もの言はず、
　ものを言はぬは啞ならむ。

○啞にもあらぬ舌あらば、
いかにたびゝとかたらずや。
　いづくの里を迷ひ出て、
　いづくの里に行くものぞ。

○いづこよりいづこへ迷ふと、
たづぬる人のあはれさよ。
　家ありと思ひ里ありと、
　定むる人のおろかさよ。

○迷はぬわれを迷ふとは。
迷へる人のあさましさ。
　親も兄も妻も妹も持たざれは、
　闇のうきよにちなみもあらず。

○みにくしと笑ひたまへど、
いたましとあはれみたまへど、
　われは形のあるじにて、
　形はわれのまろふどなれ。

○かりのこの世のかりものと、
かたちもすがたも捨てぬとは、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

知らずやあはれ、浮世人、
なさけあらばそこを立去りね。

○こはめづらしきものごひよ、
唖にはあらで、ものしりの、
乞食のすがたして來たりけり。
いな乞食の物知顔ぞあはれなる。

○誰れかれと言ひあはしつ、
物をもたらし、つどひしに、
物は乞はずに立ち去れど、
言ふ顔にくしものしりこじき。

○里もなく家もなき身にありながら、
里もあり家もある身をのゝしるは、
おこなる心のしれものぞ、
乞食のものしりあはれなり。

○世にも人にもすてられはてし、
恥らふべき身を知るや知らずや、
浮世人とそしらるゝわれらは、
汝が友ならず、いざ行かなむ。

○里の兒等のさてもうるさや、
よしなきことにあたら一夜の、
月のこゝろに背きけり、
うち見る空のうつくしさよ。

○いざ立ちあがり、かなたなる、
小山の上の草原に、
こよひの宿をかりむしろ、
たのしく月と眠らなむ。

○立たんとすれば、あしはなへたり、
いかにすべけむ、ふしはゆるめり、
そこを流るゝ清水さへ、
今はこの身のものならず。

○かの山までと思ひしも、
またあやまれる願ひあり。
西へ西へと行く月も、
山の端ちかくなりにけり。

○むかしの夢に往來せし、
榮華の里のまぼろしに、
　このすがたかたちを寫しなば、
　このわれもさぞ哄笑ひつらむ。

○いまの心の鏡のうちに、
むかしの榮華のうつるとき、
　そのすがたかたちのみにくきを、
　われは笑ひてあはれむなり。

○むかしを拙なしと言ふも晩し、
今をおこぞと言ふもむやくし、
　夢も鏡も天も地も、
　いまのわが身をいかにせむ。

○物乞ふこともうみはてゝ、
食ふべず過ぎしは月あまり、
　何事もたゞ忘るゝをたのしみに、
　草枕ふたゝび覺ぬ眠に入らなむ。

論說

武道の發源

天知子

（中段）　武士道と武藝の開發

洶湧たる坂東太郎の水源を日本地理に問へば、本源を上州利根郡文珠山に發すといふ、然れども文珠山は直ちに坂東太郎を產みしに非ず、坂東太郎と成るべき巨物を產みしにも非ず、唯坂東太郎と成りたるものを產みしに過ぎじ、太郎をして太郎たらしめし所以のものは、境遇と及び多くの河流を併合せしに由らずんば非ず、武道の發源を搜索せんとする恰も是れに似たるものあり。

古來兵法武道家の傳說する所極めて漠然たり、曰く兵法は鹿島香取の神兵、神武天皇に順ひまつらざるを平げ給ひ、日本武尊東夷を征し、神功皇后三韓を擊ち給ふに起ると、而して又曰く、刀術は武甕槌ノ命經津主ノ命十握ノ劍を拔て倒まに地に植て其鋒端に踞みたる神術に始まると、是れ所謂坂東太郎は文珠山より發すといふの類なり。日本武尊神術を傳へて三段の位

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

を作り、源義家之れを學んで五段の位を作り、八郎爲朝之れを肥後の尾伊手則高に習ふて其技則高に超え、源義經は鞍馬の僧に學びて名譽を顯はしたりと言ふ、之れ漸く武器使用の發達を現はし來りしものなるべしと雖ども、未だ武道の文明史に直接の關係あるものを見ず、然れども義家時代以下に至りては恰も坂東太郎が上利根川と稱して流下するの頃にてありし。余は此上利根川が二大河流を合せて終に武道てふ大流を爲したるものを見る、此二大河流とは何ぞや、曰く武士道、曰く禪道、之れなり。

余は先づ武士道を略述するの暇を借らん。

古來日本の社會は何を以て良心とし何を以て道德氣風を維持し來りしや、儒敎の經書は早くより渡來して頗る上流の眼に觸れしものありしと雖ども、之れより先き、所謂天降人種が土蜘蛛人種を壓服せし以來、宗族制度は常に彼等を支配して氏を重んじ族を尊び、神聖なる血の觀念は彼等の良心を洗ひつゝありしなり、而して漸々極端に迄發達して源平二豪族の如きは、殆んど神の民アブラハムの子孫と稱して異邦人を蔑如したる、彼の道德的一種のチーソリチーを血統に含まして自尊的克己の氣風を燦然たらしめたる猶太人の如く、我れは清和源氏何代の嫡流なり敵に取て不足あらじと、陣頭に先づ血統の競爭的神聖價値を吹聽し、或は何々親王の子孫なりと起請文に宗族の尊威を犧牲として良心を誓ひ、以て有力民權のシヴアリーを結合せしめて社會の良心と爲したるなり、則ち此良心の標準たるモーゼの律法は彼れが稱する氏文なるものにして、其氏文は威嚴を掌握する人間以上の大手腕なる彼れがエホバは弓箭守護神あるもの之れなりき。然るに此質樸なる觀念は平氏驕奢の極に至りて壞亂すると甚しきに至り、慨然として矯風の聲を放ちて墮落民族を興起し、終に一種の美風を創建せしものあり、此人を是れ源頼朝と爲す。頼朝は日本の爲めに感謝すべき人物なり、其驕慢惰弱なる羅馬の末路を倒して木強龜豪のチユートン的手腕を逞うしたる頼朝は吾人が感謝する所に非ず、六十六國總追捕使と成りて武力制度を日本に開業せし頼朝は吾人が感謝する所に非ず、明察知能に餘りある凸顱を以て骨肉を安からしめざりし猜忌の頼朝は吾人が感謝する所に非ず、吾人は唯其戰後の頼朝に於て最も感謝する者あるを知る。彼れは平氏が惡化したる京

神惰弱の弊風を慨し、專心以て武家の風儀を敎育するに汲々とし品德を養ふは禮にありとして麁忽尾籠を戒め、沈勇を養ふは決死にありとして卑怯未練を耻ぢしめ、惰弱を矯むるは奢美を戒むるにありとして質素儉約を主として武力を養はしめ、主從恩義を重んじて死生相結託し、然諾を守りて名節に廉耻を勵まし、死を輕んじて屈辱を賤しむ、此に於て終に鎌倉武士なる人種を養成し、始めて日本武士道の俑を形造りしなり。故に槪言せば、武士道は賴朝に因て古來の宗族制度の氣風に純然たるシヴアリーを結合せられ、始めて日本に紹介せられたるものなり。

此武士道なるものは日本國民の嗜好に適して漸く消化せんとするに當り、大なる暗黑の渦流に沒入して更に一變するに至れり。此渦流とは何ぞや、則ち日本全土の暗黑時代たる應仁の亂是れなりし、彼の紫震殿左近橘の樹下に茶見世を設くるの奇觀を呈し、至尊が宸筆を錢に易へて應需の賤者に賣弄する如き怪事を聽くの當時に於て、何ぞ宗族血統の威嚴を敬ふものあらんや、社會の階級は悉く破れて古來宗族の制度潮笑せられ、氏文の威嚴と血統の神聖とは全く其勢力を打破せられ畢んぬ、而して此武士道は多少緣故ある一知己を得て忽ち投合するに至りぬ、此知己こそ則ち此時代に大生長を爲したる武藝なるもの是れなりき。

吾人は更に此應仁後の武藝を觀察するの暇を得ん。

アリアンが日本全國は一大戰塲なりと評したる應仁の大亂は骨を燃し血を煎じて人心皆戰國と爲りぬ。此に於て一意專心するものは唯武力にあるのみ、武力盛んなれば武器必ず進步す、槍、薙刀、弓箭、鐵砲、劍の如き、今日の完備精錬を見るものは實に此時代に產れたるなり。武器已に精錬せば之れを使用するの技術に辛苦鍛錬せざるを得ず、此に於てか武藝を硏究すると他念なく人々競ふて硏磨せんと欲す、而して軍旅多事にして未だ精妙の域に至らず、終に分業の自然的進步より古來の兵法は全く學問と技術とに二分し始めて互ひに發達するの機運に至れり、其學問は軍學と稱して諸國に起り、其技術は武藝と稱して軍中に行はる。當時群雄四方に割據して相併呑せんと圖り、浮浪處士を招きて城內に甲兵を練り、智勇の材力に從ひ人を登用して舊格を墨守するものなく、志士大に技倆を延べて一層武術を奬勵し、士は兩刀を枕頭に置

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

きて片時も武事を忘るゝことなく、男子十二歳にして已に刀を佩びしといふ。而して天文及び永祿以降に至りて愈々琢磨する所あり、然れども戰國の武藝は到底武器使用の發達のみにして動物的腕力進歩に過ぎず、往々亂暴の武力家を出して未だ武道の英士を產するの傾あらず。斯くの如くして豐臣氏天下を一統するに至り、人々稍々閑を得るのみならず多年の乾枯たる思想に倦みて、大に人世の美を渇望するに堪へず、美術頗りと流行して茶道連歌舞謠等は常に武事の間を點綴し、從ふて人亦自ら美術的に成らざるを得ず、此に於て亂暴の武人は禮節作方を重んじて鎌倉時代の武士道は稍々一變化を受けて尊重せらるゝに至り、武藝は終に武士道と全く相投合して一大進歩を爲したりしなり。

當時人類の思想境は殆んど血肉界の呑噬競爭に厭惡し、只管世外形而上の觀念を思ひ、宗教界に靜息逍遙せんと欲するの傾きあり、此に於て嚮きに宣教師サヴイエー一年に三千人の洗禮者を出し、宣教師學校二ヶ所を豐後に見るに至る、秀吉之れを嚴禁して傳道者を逐ひ信徒二千人餘を斬害するに係らず、人心多く之れに反して道念益々强し、而して佛教大に保護を得て德川氏に至り益々得意の盛況を爲せり、當時の戰爭は實に權と地との覇業的のみに非ずして宗教の戰爭多かりしなり、以て人心の傾向せる所を知るに足るべし、此時に當りても常に佛耶二致の競爭外に超然として默々道を修するものあり、是れ鎌倉時代に始めて表面的發現を爲したる禪道なるものこれなり。

鎌倉時代の晩年より禪は寂々として閑靜の日月を送り、常に英雄猛士の騷客に安息の默席を與えて優美を涵養し、二思想境に九万里の鵬翼を恣まゝにせしめ、折々巨物を產出して暗黑時代にも一道の光明を窺ふの榮を與えつゝありしなり。當時軍學は孫子以下七書の兵學より來りて、進退動機重もに主觀的の修養にあり、器械的に非ずして、人物にあり、此に於てか人々一心を修養するに務め、終に修禪の思想は戰將の必要とする所と成れり、此に於て禪は裏面に非常なる働きを爲して武藝も亦此道に因て漸く暗々裡に眞理を開發するに至りぬ、然れども武道は未だ完全の發達を爲すとあらざりし、時恰も禪は茶道を發起して頗る修道する所あり、而して德川氏に入りて禪の潮流は未開の武道と集合點に會流し始めて燦爛

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

たる日本武道の光彩を放つに至りしなり。

乞ふ吾人は今如何なる人物が此軍學と武道の上に演者と成りて新舞臺を開きしかを觀察し、以て武道潮流の流域を見んとするの勞を執らん。

批評

大西文學士香川景樹翁歌論に對する批評

（其二）

雲峯子

第三　歌とは何ぞや。是につきては景樹が明白に云はざりし事明かなり、否寧ろ之を説くの必要を感ぜざりしならむ。若嗟嘆の聲を歌なりと云ふが如きは勿論疎大の言なり、然れども今日泰西の學術上より定義を求むるが如きは寧ろ時代の異なるを辨せず、稚兒を計るに大人を以てするに類し、甚だ酷なりとす、古代の人が世界の何たるを知らず、日本を以て世界唯一の神聖國なりと思へりしも強ち今日より責むる能はざるが如し。

さて景樹が「感じて動く時は其聲永し」と云しを大西氏難じて曰く、「感じて動く時の聲は永きや、驚駭に發する聲、突然苦痛を覺えて發する聲永きや、聲を永く引くは寧ろ感動の劇烈ならぬ時に限らずや云々」と、感情の劇烈なりと云ふは、驚駭苦痛の突然至る時なりや、われ思ふに驚駭苦痛の如きは、急遽の感情を起すものなれど、劇烈とは云ふ可からず、寧ろ毋が愛子に別れ、處女が情人に別れし時の如きが即ち感情の劇烈なる例にして、斯る時嗟嘆するの聲は必永かるべし。蓋し突然に來らず、若突然に來るとするも其始めは感情烈しからず、從て悲哀を感ずるも薄し、暫く過ぎて後眞に感情烈しき時至るものなればなり。急遽に起る感情と劇烈なる感情とは必らずしも同じからず。然れど時としては同じき事もあらん故に景樹の云ふ所疎大なりと雖も大西氏の駁論も亦同じ弊あるにあらざるか。

「景樹も時代の子也、彼も所謂歌人の列を出でず云々」と云はれし事更に異論なし。是實に明言なり。然れども古來東西の歷史上時代の子に非りし者よく幾人ぞ。時代の子にして而して他に少しにても勝る所あらば先づ可也と云ふ可し。景樹の

如きは歌人として、歌道に於て如何なる位置にあるか。其功績及び欠點は如何。他の歌人に比して如何。是らの諸點を考究すれば可ならずや。

景樹の所謂調なるものは實に言語に盡し難きものあり。されば彼自らも斯く云ひき。

さるは調と申す堺にて實は言語の及ぶ所に侍らねば、據るに筋なく、敎ゆるに道なし。况んや筆に盡さんをや云々。

又云へるあり、

歌は幽言にして聞取難き事を成ほどゝ感ずる迄、聞えさする道に候へば平言よりも今一等其筋よく分らでは叶ふ可らぬ事と承り候斯樣の所、筆頭に盡すべきにあらず候得共少し計り御詠み募りにて候へば一隅を示して大概は御沈考の上にて御聞取り有べくやと外へ申さぬ緣言書付候也云々

此外尙此種の言多し、或は佛語を借て即心即佛と云ひ、即心即菩提と云へる、皆調は言語もて說明し難きの意なり。大西氏が「歌に舒べらるゝの事相と其聲音との調和せる所にあり」と云はれし事、餘程調の意を說明するに適當なるが如くに見ゆれども尙未だ盡さゝる所ある也、凡て道の奧義は言語もて盡し難き事、只に歌道のみならんや。われ之を聞く、武人の武道を悟る、禪僧の禪道に入る、等しく皆敎授說明によるにあらずと。歌道の秘義亦斯の如きか。之を知るは只自家の修行と、修行者の才能によるのみ。强て之を說かんとすれば景樹の本意を誤る事多からんのみ。今かりに景樹の調と云ふは意義と音韻の調和との意なりとするも尙ほかく云ふて歌道を人に敎ゆる能はず。何となれば之に依て作意を用ひて意義と音韻とを調和せしめんとするの弊、忽ち生じて、所謂僞飾の歌多く出づ可ければなり。如かず根本につきて間接に誠實を失ふ勿れと敎ゆるの害少きには。

景樹が折々人は人らしく、犬は犬らしくある所即ち調なりと樣に云ひしが、是即ち事物と音韻の調和と云ふに同じ、されど尙是にては說き盡す能はざるが故に、彼も種々思考をめぐらし、如何にしてか、調を門人等に悟らしめんとせり。其敎へし所、千差萬別人によりて同じからず、彼自らも云へり。

且其人によりて其敎の向ふ所千端萬躰に候へば、一度對面の上ならでは甘くは申說き難く候、只御歌によりて彼の御心しらひの疚しき所を診察して、聊か調じ參らする藥石の

詞に候へば、當れりや否や、甚覺束なし、猶用ひ給ふに心し給ふべきになん云々。

景樹が其門人を敎ゆるの目的只調を知らしむるにあり。之を知らしむる方法なし。只間接に其行くべき所を指示せり。此故に積極的には誠實より詠むべしと敎へ、消極的には人々の短所につき、誤れる點を指して、之を新たむべしと敎へたり。されば其敎へし所人によりて全く反對なるが如く見ゆるもの多し、或人には萬葉古今を讀むべしと云ひ、他の人には歌書は一切讀む可からず、論語は歌學第一の書なりと戒め、或は歌は平言にてよむべしと敎へ、亦歌は幽玄の道なりと徒(つれ〳〵草)に云へるは誠なりと記せるが如し、其他上品に調ぶべしとか、雅言と云ふものある可からずとか、種々に敎へしこと其一ヶ所若くは一文を見れば實に取に足らざるが如く見ゆれども、多くの門人に敎へし事を總括すれば只人によりて千端萬躰なるのみ、撞着矛盾せざるのみか、却て彼が人を致導するの眼識凡庸ならざりしを見る、恰も高山の麓に、散布する人々をして、山頂に上らしめん爲め、其東方にあるものには西に向へと云ひ、西方の霧中に迷ふものには東に進めと云ふが如し、彼に西せよ、是に東せよと云ふ等しく調の山上に達せしめんとの卓見なり。

調の事は斯の如くにして言語に盡し難しと云ふの外なけむ。今日天下歌人多しと雖も此に達せしもの稀なるべし、道の奥義は達し易からず、緇衣の人多しと雖も悟道に達するもの少きが如し、道の奥義に至つては何の道によらず、言語文字に盡す可からず。

景樹が歌と云ふは和歌に限りし事論なし。而て和歌は調にあり、調の外に和歌なし、調は誠實より出づ、誠實を外にして調なし。是即ち景樹が和歌の定義の大意と見て可ならむか。此調や、眞誠の調とは全く異るが故に彼の歌論は眞淵の議論を行くべき所まで行かしめたるにあらず、貫之より得たる所を祖述せしなり。

●正誤、前號十頁下段十五行目如きの下答字を脫す。一頁上段十二行目萬葉は萬葉さ正す。調の字はシラベさ訓すべし。一々此に正さす。

○千代田城大奥

上巻は既に批評したり。下巻は、御鏡餅曳き、新參舞、初午祭、櫻見、卯月八日、五十三次、杵聲碓聲、宿下り、女中の

悪戯、女中の交際（怪談、加持祈禱、賄賂、役徳、役徳拜領地、老女江島、見廻り、お鳥使附火事使、炎上）和宮樣御降嫁、婚禮、御寝、御懐妊御分娩、御家庭、比丘尼、葬儀、大奥の經費、千代田城明渡の二十八章、並びに附錄として御坐の間、休息の間、御小坐敷、楓の間並に御用の間、將軍服装、將軍の日課、紅葉山大紋行列、東照宮遺訓拜讀、輪王寺御門跡御對顔、御側御用弁人拂御用、上使の摸樣、將軍薨去并葬儀、葬送の行列の十三章を添え、前巻に優りて彌よ大奥の秘密を書き示せり。

老女江島の一章は、奥女中當世の景況を代言し、今人をして目見るが如ならしむ。御寝の章に、御中籠二人傍寝の如き、今人をして喫驚せしむ。大奥の經費は、尤とも注意すべし、肩絹の下に鞋をかくし、之より皆な肩絹をつけたるなど、抱腹絶倒す可し。千代田城明渡は、忠臣藏の裏を示す如く、松の八寸角の格子戸を設けたるなど、其比の周章目前に見ゆ。將軍の日々行事、並びに御側小用弁に人拂御用の二章など、徳川政治秘密の存する所を明らかにす。要するに、千代田城大奥の有樣は、當時の徳川士ひにても、決して知り得ざりし所のもの也。今にして此秘密を開き、三百年間幾多の奇策密謀の産れ出でたる大元を探ぐるとを得るは、文明の世の一慶事なり。

○今古雅譚

堀成之氏の編纂にて、市島謙吉氏の校閲たり。和漢洋の今古雅譚三百三十六項を集む。一日一項を讀みもてゆかば、一年間大凡面白き話の絶ゆるとなけん。西洋のは、類書あれど、我國のは、可也多くの雜書隨筆を見たりと思はる。支那の分の少なきは遺憾と云ふべし。而して、共に其出處を示さゞるを不足とす。

○名家尺牘文集

博文館より發兌せる東洋文藝全書の第十八編として、名家の尺牘文集を出す。尺牘は、人心の粹にして、文章の精なり。之によりて、人の趣味を味ひ、文の妙旨をさぐる。頗ぶる注意す可きのもの歟。曩に候文範出で、今亦た此書あり。「候べく候」は一種の善き文躰なり。今の山鳥の尾のしだり尾の長々しき冗文のみをもて、信書と思ひ誤まりたるものは、此の簡潔にして意長き古文躰を熟讀す可し。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

寄書

○押川方義君

山月子

「護教」の短長子は「教會及び人物」の評を初めたり、既に二三回も續きたらんと覺ゆ、其見る所の往々誤れりと思ふ處ありしも、余は默したり、何となれば、人物は容易に知り難き者なれば、多少の誤評は當然なりと信じたればなり、たゞ其七十號に於て、押川方義君を評せし評に至りては、其無造作なるに驚かざるを得ざるなり、彼は評して曰く、

押川氏の植村氏に於ける其れ猶ヤコブのペテロに於けるが如き乎、氏は植村氏の如く粗剛なり、然れども植村氏より稍々政治家らしき經略を有す、其東北學院に據りて奥羽の教勢を掌上に廻らさんと欲するの大膽と其能く靑年子弟を收攬して自家藥籠中のものとなす伎倆とに至りては蓋し植村氏のなき所にして押川氏の獨り有する所也、（附點は原文の儘）

何ぞ其筆法の護教記者に似ざるや、若し基督教徒にして、故新嶋君を評して「同志社に據りて關西、或は日本の教勢を掌上に廻らさんと欲するの大膽と其能く靑年子弟を收攬して自家藥籠中のものとなす伎倆云々」と曰ふ者あらば、誰か其妄言に驚かざらん、斯くの如きは信仰の人物を評する旨にあらざるなり、押川君は確信の人なり、熱愛の人なり、確信は、知らずして大膽進取ならん、覺へずして人を動かし國を動かさん、愛の德は、無覺の間に人を化し衆を服さん、之を見て以て、直ちに世の豪傑を評するが如き筆法を用ふる者、豈感心すべきとならんや、

蓋し押川君は新嶋君と共に明治の巨人なり、女學子は嘗て評して曰く「近世の傑士」と、余は其適評なるを信ず、君の人物はパウロに多く似たり、而して新嶋君は多くヨハネに似たり、君は深く人を感ぜしめ、新嶋君は博く人を感ぜしむ、二君共に絶代の愛國者なり、吾人は新嶋君を惜む、而して猶押川君あるとを神に感謝す、

思ふに余が此事を書する、押川君は必ず之を喜ばざるべし、されど余は基督の信者として、日本の國民として、君の爲めに一言せざるべからざるを感ず。

○其筋の御方に御質問仕候

今度淺草公園の凌雲閣にては吉原の娼妓百名の寫眞を陳列し來る十一月十三日より登閣者の縱覽に供し候由是れは我邦の體面を汚さゞる儀に御座候哉

凡そ穢き者を隱蔽するは文明國の通則に之れあり而して娼妓の道德上穢き者たるは今更喋々するまでもなき事にて彼の存娼論者といへども此の一點に於ては異論なき程の者に御座候然るに場所もあらうに日本帝都の公園中人の最輻輳する淺草公園の內に於て最も人目に觸るゝ凌雲閣の樓上に此の汚穢物の寫眞を揭げ以て衆人の縱覽に供せんとは宛も万世橋の中央に四圍を開放したる雪隱を設け人をして尻を揭げて放糞せしむると一般の次第には無之候哉

尤も世間にては糞上の蠅と均しく兎角此の汚穢物を玩弄するとを喜ぶ者多く有之候間凌雲閣の持主は射利に汲々として其事の我邦の體面を汚すや否やを顧みるに暇あらざるに基きしとは存候へ共夫れより我々良民にとりては頗る迷惑の儀に御座候若し外國の紳士來りて此の寫眞は何人の寫眞なりやと尋ねられ候時正直に答へ候はゞ直ちに日本は不道德の國なりとの土產話と相成申候はん況して海外に出て婬を鬻ぎ以て日本の品位を貶し候婦女子多き今日に於てをや其筋の御方は少數の人民たる凌雲閣の持主を利せんが爲に多數の人民たる我々に無上の損害を與ふるが如き事は万被遊間敷と存候へ共尙ほ甚心配に御座候間爲念御質問申上候恐惶頓首

大磯に病を養ふ　一書生

雜感

○日本の社會學者多きを憂ひず

秋玉庵記

學士の價値、年に月に下落して。初めは社會に持囃されたるものが、今は一把一束に見做され。新に大學を卒業したる人は勿論、多年學士の稱號を有する人だに、

容易くは賣れ口なきを見て。多くの人々は曰く、日本の社會には、學士有り餘れり。今より學に就む青年は、宜しく方向を轉じて、實業に向ふべしと。然れ共大學部内心ある人々は曰く。日本の社會決して學者多しといふ可らず。寧ろ甚少きを憾とすべし。其見て以て學者多きに過ぐとなすものは、眞正の學者を指すに非ず。只籍を學士に列するを以て、互に學者と見做すが故なり。然れ共是等の輩は、多く生活上の、一方便として、學問を修めしのみ。眞に學者たらむと志して、學問を爲せるには非ず。故に日本の社會は、學士甚多きに失するが如くなるも、其實は至て少きなり、故に予等は、世人が學者多しの歎を訝しみ、而して却て一人にても多く、學者の出でむ事を希ふに切なりと。成程世の諺にも、人多し、されど人の中に人はなしといふをあれば。學者に限らず、何れの社會にも、其内部に立入りて觀察すれば、必此歎はあるならむ。されば人は、其志す所の何事たるに拘らず。假令ば如何に、世間に類多く、珍らしからぬ仕事なりとも、眞面目に之れを爲すならば。人多しと見へて、實は洵に少なき世。世は何種の事業、何種の人をも、必之れを、歡迎するの餘地あらむ。

○人を批評するは即ち自らを批評するなり

九段坂上に立ちて、東京市中の一部分を觀察すると。富士山巓に上りて、遙に全都を瞰下するとは。其觀大に異なるなき克はず。左れば人物を批評すとも亦其如く。見る人の如何に依りて、同一の人物を、異樣視するは、免る可らざるの結果なりとす。近來人物論大に世に行はると雖も、英傑に非れば、到底英傑の志望を知るべからず。俠の分子を有するものにして、始めて俠の粹を味ふを得るものなれば。此心得なくして漫に人物論を爲さむには、啻に人をして、隔靴搔痒の憾あらしむるのみならず。折角の人物をも、俗殺し、凡化せしむる事とならんのみ。故に人を評するものは、須らく其被評者と、特點を同ふするものたらざるべからず。若し然らずして之れを評せむには、恰も無風流者の詩歌を評し、盲人の黑白を辨ずると異ならざらむ。予は君子の過ちは、常に人を信じ過ぐるにあり。小人の失は、偏に人を疑ふに存するを見る毎に。襟を正して、三省せずんばあらざるなり。其人を信じ過ぐるは、信ずべき自己を標準とすればなり。其人を疑はずんば、安んずる克はざるものは。究竟自己の心裏、惡意の存するあればなり。故に人を評するは、自己の想像し得べき區域に於て評するに過ぎず。而して其想像し得べき區域とは、多く自己の心に本づく。故に曰く人を批評するは、即ち自ら批評するものなりと。

○亡き母

予は亡き母と神の愛を除きて、宇宙間何ものか、最も自己を愛せしやといはゞ、答ふるに、躊躇せじ。母の愛は、實に犧牲的にてありし。眞に交換的にてはあらざりき。母は、予が母の愛に就て、毫も其愛を解せざりし時に於ても。心一ぱい予を愛し玉ひたりき。又予が母の命に逆ひ、眞に不孝の子たる名目を下されても致方なき場合に於ても、母は少しも予を憎み玉ふをなく。却てかゝる場合には、一層予が爲に心を痛め玉ひたりき。而して斯の如き愛は、予一人に止まるにあらず。予が父、予が兄弟姉妹に對しても悉く皆しかありき。されば母は、實に予が一家に對して獻身者又犧牲者にてありしなり、然るに予は、母の生前に於ては、少しも之れに心付かず。却て其慈愛深きを奇貨として、種々の我儘をなし、母の心を痛めしをも多かりしなり。然るに母は、其死に垂んとする際迄も、自己の命數の、如何に縮み行つゝあるかには頓着せず。一に予等が前途をのみ氣遣ひ玉ひたりき。予は母が、其夕此世を辭し玉はむとする日の午後、兄上の着し居玉ひたる浴衣汚れたるを見て、誰かに洗はせよと予に命じ玉ひたる御詞。今も猶耳底に殘りて、彼が如き際迄も、子供等の衣裳にまで心を用ひ玉へりし乎と、今日にして之れを思へば。坐ろに感泣に堪ざるなり。予は予が母が、此世を辭し玉ひたるの后に於て、始めて母の愛の、最も深きものなりしをを悟りしなり。殊に日一日年一年、世の風波に曝され、人情の辛慘なる味を嘗むる毎に。層一層母の愛の高く且大にして、他に比類すべきものなきを憶ひて、母の靈に、感謝の涙を濺ぎたる事は、實に幾回なるやも知るべからず。世の諺に、惡しき事ある時は、亡母の夢を見るとかいへるが。這は必ずしも亡き母が夢枕に立ちて、凶事を告ぐる事をいふには非ざるも。心配なる事などある時には、誰人の心にも、必我母在しなばとの觀念胸裡に起るべければなり。予は實驗上常に此事を信ず。予は予が母が、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

此世を去り玉ひけるは、既に五六年前の事たるにも拘らず。母は猶且此世に、存在し玉ふが如き心地するヽ度々あり。其は予が母は、予が一身上に大事ある時はいつも夢中に、予を訪ひ玉ふとあるを記臆すればなり。予が亡き母を夢見るの時は、いつも予の胸中、一個の苦痛を有するの時にして。かゝる場合には、何れの處、如何なる境遇に在るも、母の訪ひ來まさぬとなければ。予は如何にするも、母をは、全く此世に亡き人さは思ひ得られぬなり。而して予は、事の繁雜なるに紛れて、母の命日は毎月十三日にてあるとは記臆しながらも、其頃に至りて、不圖其日の、近づき然ることを忘るゝともあるなり。然るに予が忘れたるさ否に拘らず、十二三日の文に至れば、必ず母は予が夢裡に顯はれ玉ふ。予は母の夢によりて、俄に其日を數へ、母の命日に、際し居しを悟りしとも屢なりき。されば强ち予が記臆亡き母を夢裡に呼び參らするのみにあらで。母より訪ひ來ませるが如きともあるなり。思へば我母は斯く亡き後までも、予をば捨玉はざるに、予は母の生前嘗て一言、感謝の念を表したるともなく。今日母の亡後に於ても、庭の訓に背き奉る事のみ多く、可惜母の御名までも、汚し奉らむさはするや、予は古來善良の人は、必善良の母に依りて、出されたる例を思ふ毎に予は予が痴鈍にして母の、美質善行を發するを得ず。却て予が缺點の多きに依り、人をして如何に予が母を想像せしむべきかさ思ひて。自叱自責の苦しみに堪へぬなり。况んや予が母は既に此世に亡き人なるをや。母を顯さむも汚さむも、實に予の躬行如何にあるのみ。予は亡き母を思ふ毎に、基督信徒さして、神の御榮を顯はす的の覺悟を以て、又之れを母の上にも、推し及ぼさまく欲するのみ。吁是も亦母が慈愛の賜なるか。

時事

○教科書撿定の秘密漏洩

文部省圖書課長澤柳政太郎氏は、願によりて官を免ぜられたり。而して、其廣告の書に云く、今回小生辭職するに至りたるは、圖書撿定に關係ある書肆等にはあらざるも現今全く文部省に緣遠き人に秘密にす可き者を示したるを不都合の所爲なるに付き罪を引き退官を請ひたる次第にして事の其人により世間に漏洩したると否とには關係無之……雜談の際一應の尋に對し輕卒にも之を示したる儀に有之候と。此免官もとより理ある可しと雖ども、所云る其緣遠き人の誰なるやは、國民が尤とも聽き且つ質さんとを欲する所ろのもの也。巨木つねに風に折れず、細樹矮木のみ身代に立つは憫然の事にあらずや。

日々新聞は云く、大木伯は澤柳氏の答書を應接室の机上に置きしに、出入の書籍商鶴橘某が竊み見たるより漏洩せりさ。夫れ、前の文部大臣たる人物にして、今の圖書課長に强ひて秘密を語らさしめ、而も其書付にせしものを應接室の机上に置きたるより世に漏れたりさ云ふに至りては、大怪事殆んど信ず可らず。之を若し信なりさせば、大木伯决して許す可らず。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

傳ふらく、大木伯辭職せりと。

○東洋自由黨

十一月六日、江東中村樓に於て結黨式を擧ぐ、其式文に云く此時に當り黨弊藩閥を盪滌して經天緯地の大策を定めんには須からく剛健正大の公黨を樹立せざる可らず、而して之が大責任に當る者は實に我黨にあらずして誰ぞや我黨既に剛健正大なり况んや一陽來復の期に際し天意人心の順應して崛然勃興するをや

剛健正大の四字は愛すべき文字也、此文字に生命あらしめざる可らず、生命は活動によりて知らる、未だ活動せざるに當りては、何とも評することを得ず。

○北海道開拓の所云る大計畫

北海道拓植振興會なるもの起り、六千万圓の資本を、富籤の方法によりて募集せんとす。人は云ふ、之れ大計畫と。あゝ大計畫豈に富籤を賴みにするの精神より發せんや。雷鳴は蓮の蕾を破る音よりも小なり、空大にして誠意なき事業を目して徒らに大事業と云ふことなかれ。眞誠の大事業は、奇策を許さず、極めて平凡尋常の德より發す。

○賭博刑廢止運動

近來一種の壯士現はれ、盛んに賭博刑廢止の運動を爲す由。單に法律上より論ずれば、賭博の事必らずしも大ひに責む可きものあらずとするも、道德及び經濟の上に於て寬假す可らざるのものたり。况んや此刑を廢するに時期あり。今の如く日に汚に就かんとするの傾向に乘じ、更に怪慾を滿さんが爲めに此運動を爲すと云はゞ、吾黨は之が爲めに斷じて之に反議せずんばある可らず。富籤と云ひ、賭博と云ひ、社會が之を寬待せんとするの輿論益々行はれ來るは、大弔事なり。凡そ一度び設けたる此類の禁刑を解かんには、社會の公制進步して畧ぼ此禁刑を要せざるの傾向に向ひたる時期に於てせざる可らず。

○牛疫傳播

勸業及び衞生の二官課が民を保護す可きは斯る時にあり。病の傳播を防ぐの事は言ふ迄もなし、更に其の營業と滋養とに關する上より保護せざる可らず。凡そ此樣の節は、肉食者は大ひに恐れて一概に肉を食せず、肉商者は左なきだに損毛夥しきが上に、賣れずしていよ／＼損する者なれば、官課は親

切に督視し、健全なる肉に證明を與へて、其賣れ行を保證し、且つ滋養を取らんとする者に安心を得せしむ可き也。くだらぬ干渉は宜しからねど、斯る心切の世話は官員の爲すべきもの也。大根、人參の統計表を調べ、牛の年齡を屆出よと迫る類に較ぶれば、稍や有効なる世話と云ふべき也。

○贈正四位

故正五位子爵青山忠誠君、正四位を贈らる、其表彰の辭に云く、忠愛の志深く勤儉躬行資を捐て才を育し專ら國家に致さんとを期す其操行實に華族の龜鑑たりと。

○田島晴雄

日本秘鑛業會社を失敗せしめ、當時は吾黨をして技師可憐とまで歎ぜしめたる田島晴雄は實に詐僞師なりき。彼遂に、重禁錮三年、罰金三十圓、監視六ヶ月を科せらる。

○品川彌二郎子

政論家としては服せず、只一の社會改良論者として重んじ、品川彌二郎子が、恙なく歸京せしを歡迎す。

○信用組合

品川子、大坂堀江の懇親會に於て演說して曰く、

夫の信用組合法案は、余曾て熱心に之を主張して…法律となしたる上、人民をして設けしめんとせしものなれば、所云る逆に行きたる者也、然るに今度の巡廻に於ては所在此信用法の事を說き法律を待たず民間より信用組合を設けしめんとせり是に於てか初めて順道を行かんとするととなれり。

今にして之を悟る、寧ろ晩きが如しと雖ど、尙可なり。吾黨は、此仕組が法案とならず、但だ生きて動かんとを熱望するものなり。

○千島探撿

海軍々人等が發起にて、明年千島探撿の計畫あるよし。日本殖產の爲めに大ひに賀す可きは無論、軍艦に對する世人の情熱を促すに於て大ひに益あらんとて祝す。

○國立敎育期成同盟會

最下最上の兩敎育を國民費となすべき故よしは、何人も承認する所なるべし。故に國立期成同盟會の主旨には何人も贊成す可し。但だ其方案に至りて異論存す。此案尤とも深く講究する所なかる可らず。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

片々

可愛子編

●東京青年會　十一月三日は天長節にて、我國臣民の皆紀念し祝賀すべき日なるを以て、東京青年會に於て、同日午後七時より祝會を開かれ、樓上には旭日の國旗を交叉し、卓上には菊花を瓶に挾めり、渡瀨寅次郎、本多庸一、三好退藏三氏引續て演說せらる、三好氏は自らの演說を終るや、兩陛下萬歲、日本萬歲を三呼して祝意を表すべきを以てせられたれば、一同萬歲を三呼したり、其後茶菓を喫して各々談話し、又「君が代」を歌ひぬ、終りには種々の遊戲ありて散會せしは十時過ぎなりし、同席には橫井時雄、原田助二氏をも見受けたり、

同十四日（月曜日）より一週間は、萬國靑年會の催しに懸る祈禱會の定日なれば靑年會にては、連夜祈禱會を開く。

●麻布靑年會の演說會　麻布鳥居坂メソヂスト敎會靑年會の催にて、去る五日午後六時半より同會堂にて秋季演說會を開き、山路彌吉（靑年らしくあれ）、原田助（理想の人物）、竹越與三郞（歷史及哲學）三氏の演說あり、生憎大雨にて聽衆は六十餘名に過ぎざりしといふ。

●在京山梨基督敎靑年會　は二十名内外の靑年より成る、一年四回集會を開く、去る三日天長節麴町三番町會員海野氏の宅に會せり、祈禱を以て開き、會員二名の信仰經驗の談話あり、終りて會の前途につき協議する所あり、茶菓を喫して懇談快を盡せり、而して祈禱を以て閉會せり、當日の集會者九名。

●第三高等中學校靑年同盟會　は同校の職員生徒より成る、同校生徒の數は六百に下らず、されど同會々員の數は僅かに二十五人なり、信者の數を問へば、六百人中僅かに十二人なり、每週一回（木曜日午後二時より）祈禱會を開き、祈禱の後意見ある人の講義に答ふ、又每日曜日の午後には靑年會の聖書研究會を開き、同志社敎師ピール氏使徒行傳を講義せらる、同會の將來は益々有望なりといふ。

●大阪靑年會演說會　去る三日午前九時より大阪靑年會の發起にて、天長節祝賀會を同會館に開く、集る者四百名許、會員飯野勝三郞氏の司會にて、會長宮川經輝氏の祝賀演說會、會員の祝文朗讀あり、終て一同「君が代」を三呼して滿面の喜色を以て散會したり。

●宮城基督敎靑年會　は十一月三日臺の原に於て第二回親睦會を催ほし、六十餘名の來會者ありたり。

又五日には、同會の招きにて、醫學博士北里柴三郞氏の衞生演說ありたり。

●大分基督敎靑年會　同會の組織今や成れり、其會則の要は左の如し、

第一條　本會を名けて大分基督敎靑年會と稱す

第二條　本會は靑年の德性を涵養し其志氣を振起し併せて宗敎學術及び社交上に關する相互の智識を交換するを以つて目的とす

第三條　本會事務所を大分町字荷揚町十七番戶に置く

第四條　本會の目的を賛成するものを以つて會員とす

第五條　本會に幹事三名を置き會務を司らしむ

第六條　本會は每月一回若しくは二回演說或は討論會を開く又時に名士を招きて講演を乞ふとあるべし

第七條　入會せんと欲する者は會員の紹介を以て役員の許可を受くべし

第八條　會費は凡て會員の負擔とす

●東北學院通信

◎十月二十八日、ミラル、熊谷、奧三、三敎師の歡迎會を開らき、學生の歡迎辭三氏の答辭、餘興などありて盛會なりき。

◎十一月三日講堂に於て、唐澤造酒氏が司會の下に、聖壽萬歲を祈れり。

◎東北學院開院式は、本月中旬を以て執行せらる。

●三重縣通信

◎天長節に於ける津市基督敎靑年會　天長節にては、津市基督敎靑年會員の催にて、津市基督敎會堂にて、會頭山岡牧師の「基督敎と忠君愛國」てふ演說あり、「神を敬し王を尊ぶべし」といふ小册子を頒布したり。

●同志社通信

◎去る一日片岡健吉、坂本直寬二氏來校演說をなせり、片岡氏は、古武士の風と基督敎徒の俗と大に相似たるものあるを對照し、一は神に獻身し、一は君に獻身し、一は聖書を味ひ、一は孔孟を學び、一は神恩に感激し、一は主恩に刺激せらるなど、說去り說來りて終に四十萬の士族が彼程迄に舊日本の社會に勢力ありしとせば、我基督敎會も亦能く同數の信者を造り得るに於ては、以て天下の習風慣例の改革一新し得る筈にあらずや、と論じ、坂本氏は石川島獄中、基督が弟子の足を洗ひ玉ひしことを思ふて、雪隱の掃除をも甘んじモーセが埃及の寶を捨てしことを思ふて、自由の爲に盡すの切要なるを感じ、從來政府の爲に祈禱し能はざりし身が、此時よりして之をなし得るに至り、始には宗敎を侮りし同囚者も、後には自ら道を求むるに至りたる等の實驗を述べて、基督に因れる世に勝つ精神のみ能く世を救ふを得べしと斷ず、誠に有益なる說話なりし。

◎天長節には勅語奉讀式あり、森田久萬人氏の愛國心に關する話あり、愛國てふ心も、之を一種の感情に止めず、加ふるに道理を以てし、活用して事業に顯はしてよく成効ありといふべけれと述ぶ、終りて秋季大運動會を上加茂に開く、旗奪綱曳、擊劍、柔術、珠拾等、快を極て歸る。

◎クラーク紀念神學館は、去る四日を以て其定礎式を擧ぐ、海老名彈正氏の演說あり、クラーク氏は米國の一婦人、曩に其一兒を喪ひ之が紀念の爲に金を送りて神學館建立のことを申込み、約成りて今日此に至れるものなりと云ふ。

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

き、日本の温暖中和なる風土、日本の優美清麗なる富士山、日本の淡雅輕快なる櫻花は、日本人の氣風を嚴肅眞面目にするに堪へず、日本の衣は輕く、肉は淡く、家は薄く、日本人を沈重濃厚にするに堪へず、たゞ在る所ろの最大なる感化は賢母のみ、母にして、若し剛く、且消からば、其子は、忠愼義熱の子となるべし、母にして義理を重んじ、神を貴れ、人を愛するの道念に强からば、其子は熱心熱愛の人となる可し、今に於て日本の人心を改良し、日本の國風を一變するの最大有効なる法方は唯だ、母を賢くし、善くし、清くし、强くするにあり。

第七章　フレーベル氏及幼稚園

一段　幼稚園の種

(一)、エフ、ダブリウ、パーカー氏曰く、第十九世紀に於ける、尤も切要、尤も遠大なる教育上の改革は、フレーベル氏が、發起したる、新教育なりし。ヘンリー、バーナルド氏又た、カンチクチカット州の知事に報告して曰く、全世界に嘗て、目擊したる、幼兒開發の教制中、尤とも創見なる、尤とも注意を惹くに足る、尤とも哲學的なるは、即はち幼稚園なりと。フレーベル氏自己も亦た、之を至大の發明なりとせり、其の幼稚園の事を名付たる年一千八百三十六年は、尋常の年にあらず、人類に、一新紀元を開きたる年なりとて、當時起草したる論文に題し、The year 1836 requires a renovation of Life と云ひぬ。實に幼稚園の發明は、教育學史中絕大の發明なり、故に人類歷史中亦至大の發明なり。

(二)、幼稚園の發起者は、フリードリッヒ、ウイルヘルム、アウグスト、フレーベルと云ふ。一千七百八十三年シウリンジアン森林中の一小村チーベルアイッスバッハに生れ、一千八百五十二年七十回誕辰祝月の翌る月マリエンサルの片ほとりシエエイナにて死せり。左れど、フレーベル氏の前、毫も幼稚園の種、地中に存せざりしには非ず。

(三)、獨逸人コメニアスは、フレーベルに先つこと一百八十年にして Schola Materni gremi, or school of the mother's breast 母の胸の學校、即はち、家庭教育と云へる一書を著はし、中に幼稚園教育に似たる事項を論述したり。フレーベルは哲學者のラウセ氏によりて、此書の讀む可きことを教示せられ、通讀玩味して大に得たる所ありと云へり。又フレーベルに先つ一百年にして、チベルリンはボスゲスにて小兒の爲め學校を開き、サラ、バンジエット及ルイセ、シエップレルの二女史を用ひて之が教授と爲し、米國にても十九世紀の初、すでにゼームス、ブチヤナン並にエムエル、ウイルダースピンの兩氏同樣の說を述たり。左れど、コメニアスの小兒學校は專ら母を教へんが爲に設け、其他の人の說は小兒の學校として設けんとせしが、フレーベルは之をキンデルガーテンと號け、小供の園と云へり、人類の若き苗を養ふべき園と云ふの義にして、自ら學校とするとは異りぬ。

(四)、故に、フレーベル氏が幼稚園は即はち、フレーベル氏が創原發起せしものたるは勿論なれど、氏に先ちて氏に注意を與へたる論文少しとせず、且つや、ルッソウ、ペスタロッチの如き新教育說の主唱者は人類の教育と云へるとに對するフレーベル氏の意見を大ひに誘導したり。就中氏は、ペスタロッチがイベルダンの學校に趨き伴ひ來れる三人の書生を入れて、自らは助教し、且つ學びたり。フレーベルは要するにペスタロッチが門弟なり。

二段　フレーベル氏

(一)、憐しむべし、フレーベル氏は、幼にして母を失ひ、極めて冷かなる家庭の中に人となりぬ、彼は温かき母を有するとペスタロッチの如くならず、寧ろ不幸の兒コメニアスに似たりける。されど、彼の憐しむべき不幸は人生の幸福となりぬ。彼は幼時の冷遇を追憶して、人の子の爲に慨歎し、常ならず温愛を幼兒の爲に養ひける、其父は「チーベルアイッスバッハ」及其邊りの地の牧師なりき、其家庭の事に心を注ぐよりは寧ろ寺領内の事の爲に眼を凝めたり、母逝きてより、繼母來る、繼母の欠缺を改めて擧ぐるを要せず。母の兄弟之を見て可憐きとに思ひ、不憫に過して、嘗て己が家に引取り養育しける。

(二)、小學校にありては、非凡の人の幼時に屢ば見るが如く、彼は亦た遲鈍にして餘り快活勤勉ならざりき、されど何事をもせず怠れりと云ふには非ず、何事なか大に沈思するものゝ如く、尋常の日課に厭足らずして頗る不満の躰なりき。居年

の著書「人類の教育」(p一六(二))中に云く、

人は總じて、特に取分け幼なきときは、自然界に親接すべし、自然界の現象の外形としては、些細なる事柄に對してには非ず、自然界の内に生き、自然界の上に支配する神の生氣に對して親接すべし、實に幼な子は、尤とも深く之を感ずるものにて亦尤深く之を需むるもの也と。

氏の幼なきときは、實に此を求めたる也、されど小學校の切々の理學は、彼に天地の圓滿せる美妙調和を一躰にして說き示すを能はず、僅かに纖縷の中に錦の片々を混じて、之を與ふとは云へど、一聯連續せる完全の天の衣を與ふるとをせざりき、彼は實に饑渇くが如く之を慕ひたり。

(三)、斯くして、彼は小學校内に不滿の月日を送りぬ、教師及鄕黨は云く、彼は學者となるを能はず、其の異母弟の方こそ望みあれと。彼は棄られたり、獨り、シュリンジアンの森の中に逍遙し、日々亭々たる喬木を望み、綠々たる青草を踏み、禽鳥の聲に耳を澄まし、溪川の水に心を洗ひ、梢吹く風の音を音樂かとあやしみ、ましらの聲を友の語るかと感じける。彼は此間だに一種異様の感覺を生じぬ、彼が眼には天地は藹然たる妙なる一大調和の活世界とは見へぬ、森も草も、小鳥も流も皆な上帝の生ける思想をいと明らかに發顯すとは見へぬ。彼が十七才に至る迄彼が主なる教育は此森の中にて施されたりき。日耳曼に著名なる躰操家、ファーザー、ジャン一日奇童に邂逅したり、此の奇童は言はざる石、もろき蜘蛛の巢を取りて驚ろくべき絕美の天理を發輝せしめたりと言ひき。而して此の奇童とは即はち、フレーベルの事にてありき。

(四)、十七才、長兄に伴なふて、ジェナの大學に入り、諸々の科學の調和を學ばんとて、刻苦せしが、學資中途に斷え借財意外に嵩み三十シルリングの爲に九週間入牢せられて遂に校を去りぬ。彼は之より、農夫となり、土地測量者となり、計算家となり、秘書記となり、轉々流浪して世の波にもまれもまれける。

(五)、外なる彼が情態は、千變万化せり、左れど内なる彼が思想は日夜に伸張し、殆んど一徹の方向を以て漸次に生育したり。彼は世の中に立身せんより Getting on 其知德を自脩完備 (self-completion) せんとせり、彼は其自叙傳に曰く、

余は此の變遷の間に余が心の中に余が自身の世界を荷ひ行けり、余が深く掛念し、切に養成せんとを欲せし所ろのものは即はち此の内なる自己の世界にてありき。

信仰に富み感情に熱き此の有爲の青年は心中常に平らかならず、何事か大事業の目前に存するとを直覺して、之ぞ即はち自己が天職なりと確信する所のものを未發見せず鬱勃たる熱情は地中の烈火の如く何處にか一條の途を得て迸出せんとすれど、外界に之を導くの途未だ開けず、煩悶として然れども拮据して前途に進み進めり、一千八百〇五年(二十三才の時)友人某の懷友帳(アルバム)に記して曰く、

天は君に遠からず室爐と愛すべき妻とを與へん。余には尙ほ休なく遍歷流浪するとを許せ、世界に對する吾が眞の關係は何如に吾自己の内なる人に對する吾の關係は何如に此等の問を考へ得べき時を余に與へよ、人に麵包を與ふるは君が任なり、人に彼自身を與へんとは余が務むる所ろなり。

(六)、彼は、未だ其天職を得ず、神は何事にか大ひに用ひ玉はんと信じ、轉々種々の業にうつりぬ。后ち、ペスタロッチの主義を實行する或師範校長彼れを見て、彼は教育者なりと觀識し、當時その執れる建築の業を抛つて、その師範校中に教授たれよと勸告せり。アヽ此の大教育者は、かくして初めて教育界に入りぬ、此時の感は彼が自叙傳に記せし如し、云く、

三四十の童兒の前に立ちし其とき、余は初めて本領を得たりと感じたり、余が久しく慕ひ望みたる生涯を今初めて發見したりと感じぬ、余は直ちに兄弟に書を送りて報知しぬ、余は魚の水中に泳ぐが如し、非常に幸福なりと記したり、

(七)、二年間此校にて教授し、著明なる良結果を得たるに、彼は決して之に滿足するとなく、自ら省みて、自己の準備の足らざるを切感し、遂に教授の任を辭し、僅かに一家族の三人の子を預かりて、之に教へたるが、之にても尙安んずる能はず、遂に此の三人を携へて、イベルダンのペスタロッチが學校に入門したり。千八百〇七年より千八百〇九年迄即はち彼が二十五才より二十七才に至る迄は、所云るペスタロッチ主義の泉源に來りて之れを酌み、自ら之を飲み味ひたり、ペスタロッチは、直覺直感を以て動き、フレーベルは稍や系統ある思考の順序に隨ひて動く、さればペスタロッチが教ゆるよりも更に多くを推考し推窮し、此の二年間に得たる所ろの利益淺少ならざりしに、彼は尙ほ以て是に滿足するを能はず、思へらく、人も自然も同じく上帝より出でたり、同源より發出せるの流は、豈に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

同様の法則を以て支配すべからざらんや、自然法を研窮し、其天則を研窮するを更に精しからば人の教育法に於て、益する所ろ更に多からん、と。彼は此の觀念を以て、ペスタロッヂを見、此の自然界の尊崇者も、彼が眼には尚ほ滿足せざる所ろあり、自然界の神聖を敬ふを尚ほ欠けたりと評し、自己は更に一層自然の法則を研究せんとて、過る十一年間中途にして廢したる大學教科を再び追究せんとに決し、一千八百十一年その二十九才の時、ゴッチンゲンの大學に入り、后ち轉じてベルリンに行きぬ。

(八)、此の大學教科は、彼が多年の思想を一層に強くし、更に一進歩を與へたり、其自叙傳當時の事の記載に云く、

多年余が冀ひ望みたる、講義今や余が心と靈との必要に應ぜんとて出で來れり、之を聽きて惟れば、宇宙万物の內部に於て、互ひに結合調和し、其妙なる契合を發達して、能く表に顯示するの理を嘗てよりは一層熱心に感じたり、而して宇宙万物に此の調和の存することと並に此調和の中より永遠無窮に漸次開展しつゝある異樣の万物の態狀は自から同一源より發するを等を暸解するは人類に於て爲し得べきの事たりと思ひぬ。斯て、人の生涯も、事業も、思慮も、感情も位置も、皆な一個人として存する其の調和せる獨一の所ろより發し來るものなりと云ふを明かに解し、切に感悟したる時、瀏然として悟れるものなり、余は亦た復たび教育上の問題に口を挿むことを得べしと自信し來りぬ」と(自叙傳、八十九頁)

(九)、されど、靜かに大學の窓の內に文讀み暮すこと能はざる珍事出來したり、時に一千八百十二年九月、ナポレオン、ボナパート晉士亞モスコーに一敗してより此方、さしも天下を席卷したる大帝が、勢威少しく色たちて見えけるにぞ、四方不平の民心機を察して迸發したり。此に於てか多年佛蘭西人の足下に屬したる、プロシア人は、ウイルヘルム大帝此の方養成したる英氣軍志を快復し、國民皆戰はんとを欲せり。此時、プロシア王の有名なる to my people の徵集あり、恨を呑みて垢を食ひたる、プロシア人何れか奮激して之に應ぜざらん。フレーベルは純然たるプロシア人にてはあらざりしが、其情と靈とは全く日耳曼人なり、即はち此の徵集に應じ、一千八百十三年(三十一才)リウッゾウの軍に馳せ加わりぬ。

(十)、然れども、彼は軍中尚ほ教育上の思想を放擲するをあらず、其自叙傳に記すらく、

戰ひ勞れて、暫し息む折々、向來教育者として招かれ居る余が天職の事に付きて思慮せずと云ふことなし、否な啻に休へる時のみならず、凡そ戰鬪なわなる時に際すとも、其間、尚之を忘れたるとなし、故に戰爭々鬪の間にも、多少教育上の、經驗を得たりと、

彼が從軍は少からぬ益を彼に與へたり、彼は之によりて身躰を鍛錬することを知りぬ、身躰を鍛錬せずんば、心の思ひを實行するを能はざるを知りぬ、もしカントが軍に從ひしことの經驗が其晩生の哲學論に莫大の影響ありしことを思はゞ彼が從軍も亦た其教育論の上に大なる關係あることを悟るべし。特に彼は此際、良友二個を得たり、即はち彼より年若き十年の Langthal 及び Middendroff なり、彼等二人は戰場に於て離れがたく、フレーベルに結合し其后一生彼に伴つて彼が教育上の助力者となりぬ。

(十一)、千八百十四年五月、平和條約の結ばるゝと共に、軍を去り、プロフェッサー、ワイス氏に從ひて、礦石博物館の、保管となりぬ、當時其感想を記して曰く、

吾手にもてる石、吾眼の下の石も言ふべき形を採れり、結晶石の世界を見れば、人の生涯とその法則とを悟るを難からず、啻に之を悟り得るのみならず、一層確實なる、一層感ずべき言語を以て人生の眞の生涯と云ふものを說き示す也。地理學、及結晶學は、余の爲に知識の高き深き境界を示し、余が研究に、思考に、勤勉の爲に、一層高き場所あるを指し教ゆ。自然と人とは其樣々なる發達上の段楷によりて互ひに其本性を解き明すの助を爲すが如し。余が見る所によれば、人は自然界の種々の物質を知識するによりて自己と、その生命とに關する知識を得るの基礎及案內を得並に、此の得たる知識を發顯せしむるに於て、大なる準備を爲すとを得るが如しと。

彼は、大學に於ける研究と其后の實試及默想とによりていよいよ切に天地間の美妙調和一致と云ふことを認め、人の教育に尤とも大切なるは、學術が他の自然界の諸生物の發達法に付きて研究し得たらんが如き方法に隨ひ、以て人の圓滿なる發達を爲さしむるにありと信じたり。

(十二)、彼は、寧ろ科學的に傾むきたり、此に於てか初めは博物學の教師とならんとせしが、見解いよいよ擴まりて、志望亦高まり、遂に彼の二人の良友二個の隨

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

伴者をして學ばしめ、その助力を以て、彼自身が理想せる所云る「新教育」を實試せんことに決心したり、時に千八百十六年、その三十四歳の頃なり。兄なる人前年死して、其子遺れるにより、其家ある所、グライシャイムに行きて、男女の遺子三人外に他の兄弟より賴み遣わされたる姪二人を合し都合三人の子弟を以て所云る、「新教育」學校を開きたり。暫らくして此小き校をカイルハウに移す、カイルハウは即はち、教育上の新信仰のメッカとなりぬ。彼の二人の者、主に其親戚たるパロップ、及びフレーベルの四人固く團結し、非常の熱心を以て教育したり、安んぞ結果なからん、次第〳〵に隆盛に趣きしが、金錢もとより彼等になし、彼等時として饑んとせしこと幾干なるを知らざりき、或時は子弟共に森林に入り木の實を拾ひ、之を粉にして僅にパンの料となしたることあり、加之、人民愚にして新教育を疑ひ、何かの騒動ある折々怨を之に歸して一揆迫害せしこともありき。

然れども、日月の運ると共に、新教育の光漸やく輝やき、諸方より注目せらるゝに至れり、新て十年、一千八百二十六年、フレーベル四十四才に至りて彼の有名なる The Education of Man.「人類の教育」は出版せられぬ。

(十三)、其后カイルハウをパロップに托し、フヰツルランドに移り、蓋にペスタロッチが住居したるベルゴドルフに居し、政府の委賴を受けて、小學校教師の訓錬、孤兒の養成等に從事したり。然るに此校に入るに先ちて既に性情の發育を害し、最早傷きたるものを携ひ來るが故に之を圓滿にすると既に晩きを知り、此に於てか更らに、初代より完全なる教育を施し與へざる可らずと悟り、いよ〳〵幼稚園教育と云ふものに心をかたむくるに至りぬ。則はち再び、カイルハウに歸り、ブランチンバーグの程近き村にて初めて幼稚園を開く、名にキンデルガーデンと云へるは即はち子供の園の義なり、時に、千八百三十七年、その五十五才の時なり。

(十四)、以后三年數度び幼稚園の論を公告し、世人の之を聞くと漸やく熱心となりしが、彼の最始の幼稚園は、資金の欠乏によりて、遂に失敗したり、彼は不得已之を廢止したり。其后は專ら、教師養成に心を傾むけ、后代の爲に尤も益ある生ける種子は播付たり。彼の女教師養成に心を傾むけたるも此頃なり、彼の男爵夫人フォン、マーレンフホルツ、ビウローがその子弟となれるも此時なり。

(十五)、然るに新思想は常に舊き皮袋を破らざると能はず、ミッテンドルフと云ふ議員は、日耳曼の巴利門に於て幼稚園を彈劾したり、又、フレーベルが猶子が出版したる書籍中に社會主義を教ゆる所ろあり、之れフレーベルが意見なりと誤解せられ、新しきフレーベル黨は、舊きとの敵なりとの誤評喧々囂々に起り、遂に文部大臣、ラウメルは千八百五十一年に令を發し、プロシア國内にてフリードリッヒ、フレーベル及其猶子カール、フレーベルの主義を學校内に教授す可からずと禁制したり。有名なる、ダイステルエグを會長にしたる教育會議は、此の亂暴なる文部大臣の布告に反對するの議決を宣告したるに拘はらず、文部大臣は聾耳を發て、之を聞くことなし。フレーベル死せし后ち十年間依然として此の布告生存し、其骨既に枯れて、非幼稚園の官令尙ほ墓標の上に立ちぬ。フレーベルは、此の布告を生きて久しく聞くとなし、其翌年、一千八百五十二年五月、その七十古稀の誕辰四方より祝奉せられたるの翌月、溘焉として眠りぬ。

以上、クイック氏教育者改革家列傳による所多し。

三段　幼稚園元理

(一)、ペスタロッチは「自ら考ふる」と云ふとを第一とし、其教育は此の考を起さしむるとを旨となしぬ。フレーベルは「自ら働らく」と云ふとを第一とし、その教育は、この働を爲さしむるとを旨となしぬ。故に、總べての教育は皆な自活動の趣を爲さしむべきを主張すと云へとも、中に就き、發達の最始たる幼兒の教育には殊に此の趣なかる可らずと云へり、「フレーベル」は此の主旨によりて、新教育の精神を先づ尤も多く幼稚園の中に吹込たり。

(二)、幼兒は、躰をも心をも常に止む時なく活動せしめんとを欲するなり。故に、手の達す可き限り、之を試み、心の屆く可き限り、之を考ふるとをその性とす、何ものにても、自ら用ひ、自ら試みずば安んせず」。又幼兒は、同伴共交の性を存す、友と交はりて、その情を慰めずば安んぜざる也。而して、その心の中に、道德上の諸々の性質正に發達しつゝあるが故に、好く整理制裁したる情交同遊の中に、この性質を正當に發達せしむるとを勉めざる可らず。

(三)、此等の主旨により、尤とも適當したる教育法を求むるに、幼兒に遊戯せしむるに如くとなし。幼兒の事業は遊戯なり、特に「ナイヅナルム」が歌へる如く、眞似れると、及び「后來世に出でゝ、人と共同するとの模型たる」同輩と共に與にするてふ意味の遊戯は實に幼兒の事業なり。モンテン曰く、其の遊戯は、實に眞に

皇后陛下御覽濟の書
明宮殿下

再版

(リツトル。ロード。フホントルロイ)

巖本善治妻譯

小公子

小供のよみ本

クリスマスの贈物

森田思軒居士の批評

(前略)又た若松賤子を得たり「小公子」の若きは小生竊かに推して廿年來第一の譯となす唯一と云ふに非ず第一の等列に在るべきを云ふなり「雛嫁」は驟かに之を看れば少しく「小公子」に遜るに似たり然れども之を邦語に移すに當りて「フホントロイ」と「カパフヒールド」とは其事其文兩ながら難易甚だ同じからず遽かに軒輊す可からざるなり。(早稲田文學第二拾三號)

(批評)○十一月十五日讀賣新聞○經濟雜誌五百九拾八號○巖谷季雄君○十一月十三日報知新聞○十一月十七日中央新聞○早稲田文學四號○國民の友百卅八號○十一月廿六日國民新聞○十一月十七日中正日報○亞細亞廿二號○護敎廿二號○下田歌子君○中島俊子君○石橋忍月君○一月十六日自由新聞。

定價金三拾八錢の所今回クリスマスの贈物として特別金廿八錢(郵稅金八錢)に引下候間續々購求被下度候

發行所 東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社

クリスマスの贈物

は面白き勸懲繪草紙にして第一小供にも分り易く大人にも敎へとなるべき意味ある書物なれば土產遺物としては無類のものに候

定價一冊五錢
郵送料二錢

其他

木村鐙子之傳	全一冊	正價金八錢	郵稅金貳錢
子供のはなし	全一冊	正價金五錢	郵稅金二錢
西洋女禮	全一冊	正價金拾二錢	郵稅なし
看護婦美談	全一冊	正價金二十五錢	郵稅金六錢
百人一首講義	全一冊	正價金貳拾八錢	郵稅金四錢
淺瀬の波	全一冊	正價金三拾錢	郵稅金四錢
蓬萊曲	全一冊	正價金八錢	郵稅金二錢

發賣所 東京麴町區下六番町 女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

福音新報

毎金曜日發行

社説は多く植村正久氏の手に成りたる宗教上、社交上又時としては文學上の意見を掲載す。

聖書解義は丁寧に平易に聖書の或部分を撰んで、其の主意を説明し、解釋餘蘊なきを期す。

教報は全國各地各教會の動靜を漏れなく報道するを期し近頃は殊更東京の教報に重きを置けり。

小説はエドナ、ライアル女兒のを飜譯掲載にて、興味は號毎に加はるべく、只譯筆の原者に諧はざるを憾む。

雑録は素とより是れといふ區域を立てず、信仰上、修德上有益にして面白き談話、論説などを之に藏む。

家庭は重もに婦女少年の爲めに平易の談話、教訓を掲載し、傍ら生命保險のこと、家事衞生のことを記す。

外事は海外に起れる宗教上、社交上、若しくは箇人のことに關し、凡そ信者の心得べき事柄を記載す。

著書新聞雑誌は近刊の出版物中、宗教にことを或は拔萃もし、或は批評もするなり。

史傳は宗教家が或は博愛義俠の心より、或は慷慨激切の情より立てたる大功遺業を記す。

定價一冊二錢五厘○十三冊(三ヶ月分)卅一錢五厘○廿六部(半ヶ年分)六十錢○五十二部(一ヶ年分)壹圓十四錢○府外は一冊に付郵稅五厘宛

發行所　東京麹町區三番町三十五番地　福音新報社

移住

岡山市門田屋敷百拾九番邸

望月興三郎

桂洲伊藤信平先生書

かな習字帖

古今集序　全壹冊　定價拾錢　郵稅二錢

右は今般新版發賣仕候間此段廣告候也

東京市日本橋區新大坂町十番地

發行所　小林喜右衛門

九州文學

毎月一回　定價一冊五錢郵稅五厘　廣告料一行五錢

九州文學は今や蔚然鎭西の文壇に一旗幟を飜せり天下有爲諸子の愛讀を待つこと切なり第二十九號は十一月十日發兌社説國士は謹嚴にして眞摯實學は學問の本領を論斷して精透人生論は人生の最大目的を闡明して明快社會壓制論は社會の壓制を痛論し文藻の二譯文は逸宕高雅日本評論記者を論評したるは清遠幽妙十年前の六合雑誌は珍奇快絶森田哲學博士の理想的書生は高尚悟遠浮田和氏君の超然的宗教は高論卓説原哲學博士の道義學史は古今哲學家の蘊奥を啓發して明裁なり

明治廿六年一月發兌の九州文學には一大新年附録を添ふ可し乞ふ刮目し待て

發行所　熊本縣英學校內　九州文學社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

交詢案内

普通の育見書位を讀み得らるゝ者にして、年頃廿五歲より三十三歲迄にて、育見に經驗ある保姆一人雇入たき方あり有志の方、亦は心當りの御方は當社迄御報せ被下度候

廿五年十一月

女學雜誌社交詢係

轉居

麹町區下六番町六番地明治女學校內

右在寓土曜日午后ヨリ水曜日午后迄

迎接日

每火曜日午后三時ヨリ

退養

水曜日夜ヨリ土曜日午前迄ハ王子ニ退養シ事務上ノ來訪ヲ謝絶シ且ツ書信ヲ受ズ急用ノ人ハ下六番町ノ方ヘ土日月火ノ四日ノ內ニ御申越ヲ請フ

巖本善治

女學雜誌市內賣捌店

麹町區上六番町	日盛堂
同　三番町	梅仙堂
同	福音舍
同　飯田町	三文字屋
同	洗心堂
神田區神保町	松江堂
同	青柳堂
同　雉子町	大塚書籍店
牛込區神樂町	積善堂
同	正導舍
同　肴町	深田彌兵衛
本郷區眞砂町	文壽堂
同	就本堂
同　富士前町	解明堂
同	盛春堂
同　二丁目	古河屋
下谷區東黑門町	三一堂
神田區松岡町	山口次郎
同　旅籠町一丁目	横本
同　鍋町	清水嘉兵衛
日本橋區本町三丁目	庭花堂
芝區櫻田本郷町	鈴木新兵衛
同　南佐久間町	栗原
同　同	鈴木
赤坂區新町	赤川市兵衛
同　同	飯田
京橋區尾張町	鈴々木
同　出雲町	金盛堂
同	山田屋
本郷區天神町	改進堂
神田區小川町	大塚雜誌店
同　錦町二丁目	貝故堂

其他書籍繪双紙店に於而賣捌く

女學雜誌大取次所

東京市本町三丁目	瑞穗屋卯三郎
同　錦町二丁目	武藏屋藤藏
同　尾張町二丁目	東海堂
同　彌左衛門町	嚴々堂
同　表神保町	東京堂
同　出雲町	警醒社
同　鐵砲町	指金堂
同　元富士町	盛春堂
同　雉子町	團々社
福岡縣福岡	積善館支店
神奈川縣横濱市	共同新聞發賣會社
同　同	万字堂
京都佛光寺烏丸	東枝律書店
同　新町竹屋町	便利堂
大坂本町四丁目	岡島支店
同	福音社
神戸元町四丁目	福音社
函館市	福音社
熊本縣熊本	草野門平
京都新町二條	大黑屋書店

一書籍代金二十錢未滿は郵劵代用不苦候、郵劵は五厘切手一割增に限る

一雜誌及び書籍代金通運便にて御送付の向は屆け賃をも濟にして御送付相成度候

女學雜誌代價

○白赤双方合せ講讀の分

十冊	前金	五十八錢	府外	六拾三錢
廿六冊（半年）	同	一圓四十三錢	同	一圓五十六錢
五十二冊（一年）	同	二圓六十錢	同	二圓八十六錢

○白赤の內一方講讀の分

六冊	前金	三拾五錢	府外	三十八錢
十三冊（半年）	同	七拾三錢	同	七十八錢
廿六冊（一年）	同	一圓三十錢	同	一圓四十三錢

一冊　金六錢　郵稅　金五厘

廣告料及無料廣告

一行　一回（廿七字詰）　前金　拾錢

同　三回以上　一割引

同　六回以上　二割引

○十行以上一割引。二十行以上二割引。

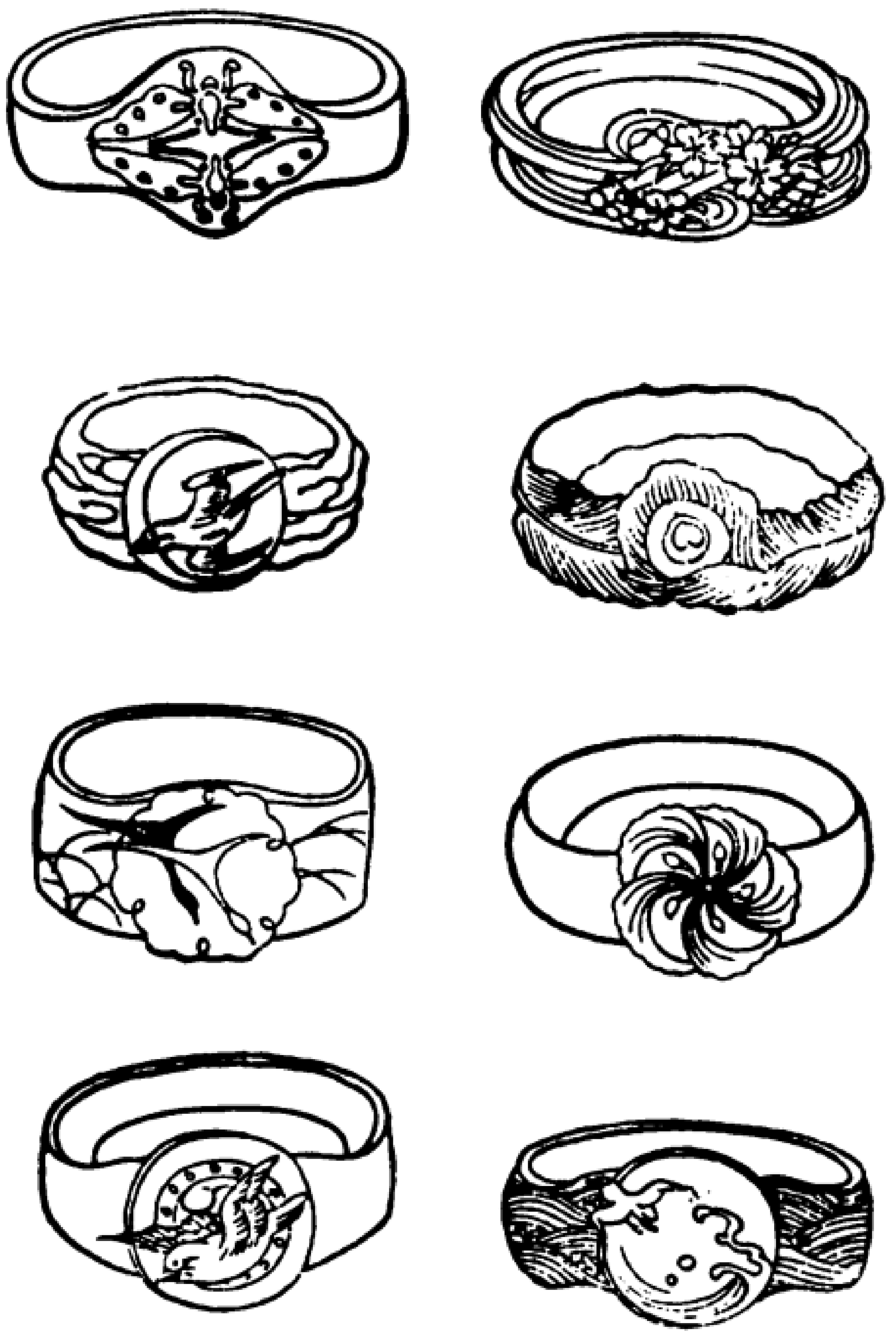
○四十行同四割引。

但し不道德なる廣告は謝絶す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く

○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部注文を要し以上半頁每に十部增さ定む。

東京市麹町區下六番町六番地
發行所　女學雜誌社
編輯兼發行人　巖本善治
印刷人　堀口庄三

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY



純金平打指環(槌目)又は(無地)四匁付十五圓五十二錢○三匁付十一圓八十九錢○二匁付八圓二十六錢

廿二金　四匁付十四圓六十四錢○三匁付十一圓二十三錢○二匁付七圓八十二錢

二十金　四匁付十四圓二十錢○三匁付十圓九十錢○二匁付七圓六十錢

十八金　○四匁付十二圓○三匁付九圓二十五錢○二匁付六圓五十錢

十四金　四匁付九圓八十錢○三匁付七圓六十錢○二匁付五圓四十錢

九金　四匁付六圓九十四錢○三匁付五圓四十五錢○二匁付三圓九十七錢

認印付は前記の外一圓增し篆刻料は一字一圓

此の外金若しくは白金(プラチナ)地へ寶石寶玉を裝篏したるもの又は種々の彫刻を施したるもの許多有之候間御來車の上現品御一覧下さるか郵便御注文あれば寶石入若しくは彫刻等の區別を指示し代金御送付あれば其價に相當の品を精撰して調進すべし若し貴意に適ざる時は購求當日より時計は卅日他の諸品は一周間以内は(府外は相當の往復日數を加ふべし)凡そ其物品に破損毀傷なきに於ては何時にても需に應じて他の物品と交換し又は原價にて買戻し聊かたりとも其爲に手數料若くは割引等を加へざるべし　但し特別の御注文は好みに依りて調製したる物品は此限に非らず其他の手續は弊堂の店則を御參觀あるべし又特に御注文の分は如何なるものにても御好に隨ひて調製すべし

東京市京橋區尾張町二丁目十八番地●電話番號三百卅三

天賞堂